

ひまわりのような 笑顔を  
守りたかった だけなんだ

# ひまわりの海

名探偵と女子高生 1

平田真子

夏の終わり、教室の窓から見える海も、何となく表情を変えたように見える。

まだまだ気温の高い日は続いているが、やはり真夏のビーチは今と違い、賑わい活気があった。今では海水浴客も、海の家もない、ただただ長い砂浜が太陽の光を浴びているだけだった。

サーファーが何人か沖の方に見えるが、今日は穏やかな波だからか、人数も少ない。

(夏休みも終わっちゃった…。今年も彼氏出来なかったし…。)

小幸(こゆき)は心の中で溜息をつきながら、そんな事を考えていた。

高校2年の夏休みが明け、久しぶりに会った同級生たちは、真っ黒に日焼けをしていたり、休み前とはイメージが全く変わっていたり、彼氏・彼女とどこそこへ行った、なんて話をしていたり、それぞれが体験した「夏」を語っている。

小幸の通う星南学園は、千葉県の上野毛が良く見える高台に建っている。  
夏休み明けの初日は、昼前で下校となった。

「小幸、一緒に帰ろう。帰りにAPPLE HOUSEに寄ろうよ。」

友人の清香(さやか)が声をかけてきた。

APPLE HOUSEとは、海岸通りに面して建っている、白塗りの壁が可愛いファーストフード店だ。

「いいよ。お腹すいちゃったね。」

学校からの坂道を海岸通りへ向かって歩く。

「小幸、お母さんは？」

「今日は確か仙台かな。」

「相変わらず忙しいんだね。」

「うん。」

小幸の母は、全国展開しているエステティックサロンの経営者だ。

母は若い頃、この地元で小さなビルの1室を借りて、一人でエステティックサロンを始めたらしい。  
口コミで、その評判が広まり、今では全国展開を果たしている。

支店を飛び回って、若いスタッフを教育したり、最近は美容に関する講演を行ったりしている。

「お父さんはいつ帰るんだっけ？」

清香がまた聞いた。

「えーと、来年一旦帰るんだと思う。」

父は、外資系の化粧品会社の役員で、今はアメリカにいる。

母がまだ一人でサロンを経営していた時、化粧品の売り込みをしにきた父と恋に落ちた、小幸は両親の出会いをそう聞いていた。

海岸通りに出る。

いつも歩いている、見なれた景色のはずなのだが、今日はその景色が少し違っていた。

「小幸！ちょ、ちょっとあれ見て！」

「ん？何あれ...」

沖の方の波がなぜか黄色く見える。

海の異変に気が付いたサーファーたちも、沖を見つめている。

小幸と清香も、浜に近付いてみた。

「あれ、ひまわりじゃない!？」

「え?ひまわり？」

白い波の中に、何本ものひまわりが漂っている。

「なんで、海にひまわりが？」

清香が不思議そうにつぶやいた。

サーファーのひとりが、面白がって、そのひまわりに近付いて行った。

ひまわりの大群をかきわけて、その中央付近に近付いた時、サーファーが「うわっ」と声をあげたのが聞こえた。

急いで泳いで戻ってくる。

「どうしたんだろう...？」

サーファーが小幸と清香に向かって何か叫んでいる。

「警察を呼んで!!!」

「え？」

「早くっ!ひまわりの真ん中に死体があるんだ!!!」

「死体!？」

訳が分からず呆然とする二人の元にサーファーが海からあがって近づいてきた。

「携帯持ってるでしょ？俺、今日携帯持ってないんだ。」

サーファーは、そう言い、小幸の携帯をひったくるようにして、電話をかけた。

間もなくして、海上保安庁が死体を引き揚げ、警察もやってきた。

いつの間にか集まった野次馬で、現場は騒然としている。

刑事が小幸と清香とサーファーのもとへやってきた。

「電話をしてくれたのは、あなたですか？」

刑事がサーファーに聞く。

「はい、そうです。」

「お名前を教えてくださいませんか？」

「小笠原です。小笠原新之助。この女子高生の携帯を借りて電話をしました。」

小笠原と名乗ったサーファーが小幸の方を見て言った。

「君たちも、流れてくるひまわりを見たのかな？」

刑事が小幸と清香に聞く。

「はい、学校からの帰り道にいつもここを通るんですけど、沖の方に黄色いかたまりがあるから、不思議に思って、浜に近付いたんです。そうしたら、この、サーファーの方が泳いでひまわりに近付いて行って...。」

「そして、あなた、えーと、小笠原さんがその中央にあの遺体を発見した？」

今度は刑事が小笠原の方を見て聞いた。

「そうです。初めは人形かと思ったんですが…。良く見てみたら死体でした…。」

「わかりました。何かあったらまた連絡するので、ここに連絡先を書いてもらえますか？」

刑事にそう言われ、3人は連絡先を手帳に書き記した。

刑事は、捜査に戻って行った。

「あ、ごめん携帯返してなかったね。」

サーファーの小笠原が小幸に携帯を渡した。

「あ、はい...。」

小幸と清香は事件を目撃してしまったショックで口数が減っていた。

「俺は小笠原。さっきも刑事さんに言ったけど。君たちは星南の高校生？」

制服に付いている校章を見て、小笠原が二人に聞く。

「はい、そうです。昨日まで夏休みだったんですけど、今日から学校で...。」

「初日から、変な事件を目撃してしまったってわけか...。」

「はい...。」

小幸と清香がうつむいて答えると、小笠原が突然言った。

「腹減ったな。何か食べに行こう。」

「え？」

「おごるよ。」

「でも...。」

「いいから、いいから。」

戸惑う二人を無視して、小笠原は自分の車に戻り、着替えを始めた。

何が食べたい？と聞かれた二人は、今日行こうと思っていたAPPLE HOUSEへ小笠原を連れて行った。

小笠原は3人分のハンバーガーセットを頼み、窓際の席に座った。  
小幸と清香も同じテーブルにつく。

アイスコーヒーを飲みながら、小笠原が口を開いた。

「名前、聞いてもいい？」

「あ、武田小幸です。」

「私は、木戸清香。」

「小幸ちゃんと清香ちゃんね。で、君たちはどう思う？」

「どう思うって？」

「あの事件の事さ。ひまわりの。」

小幸と清香は驚いて顔を見合わせた。  
なんで、この人は私たちにこんな事を聞くのだろう、そう思った。

「どうって言われても...。」

「殺人事件には間違いないな。それにあのひまわり...。何か犯人のメッセージが込められている。」

小笠原が独り言のように話し始める。  
そんな小笠原の顔を、小幸は初めてきちんと見た気がした。

(結構イケメンなんだ...。)

浜にいた時には、海水で髪も濡れていたし、事件の事で頭がいっぱいで、小笠原の顔まで見る余裕がなかった。

「まあ、調べてみる価値はありそうだな。」

小笠原がそう言って、小幸の顔を見たので、小幸は急いで目をそらした。

「調べてみるって？」

今度は清香が小笠原に聞いた。

「うん、まあ趣味というか、なんというか。」

「殺人事件が趣味！？」

「しーっ。声が大きい。」

はっとして、清香は小さくなる。

「すみません...。」

「あ、ごめん、食べてね。冷めちゃうよ。」

そう言って、小笠原は残りのハンバーガーにかぶりついた。

それから1時間ほど経った。

小笠原は、東京に住んでいる事、今日は趣味のサーフィンをしに、朝から千葉に来ていた事、年は25歳という事がわかった。

「ご馳走様でした。なんか、すみません...。」

「いいのいいの、それじゃあ。」

そう言うと、小笠原は車に乗って、行ってしまった。

「なんか変わった人だったね？」

清香が言う。

「うん、そうだね。」

小幸はそう言って、清香と別れた。

「ただいま～」

「あ、小幸さん、おかえりなさい。」

「サエ子さん、ただいま。」

サエ子とは、小幸の家に来てくれている家政婦だ。

「小幸さん、お昼ご飯は食べました？」

「あ、食べてきました。ありがとう。...優くんは？」

「優さんは、お友達の所に行かれましたよ。」

「そう...。」

「それじゃあ、私はこれで帰らせて頂きますね。お夕食、お二人分作ってありますから、温めて召し上がってください。」

「ありがとう。お疲れ様でした。」

サエ子は、身支度をして帰っていった。

「優くんいないんだ...。」

独り言を言い、小幸は自分の部屋に戻った。

優（ゆう）は、小幸の兄で、大学2年生。

両親が多忙なので、1年のほとんどを二人で生活している。

身の回りの世話は、サエ子がしてくれているので、困る事はないのだが、やはり家に誰もいない

のは寂しい。

それに、今日はあの事件の事を話したかった。

数時間後、優が帰宅した。

「優くん！おかえり。今日は大変だったんだよ！」

「小幸、ちょっと荷物くらい置かせてくれよ。」

そう言いつつも、優は名前の通り優しい顔をしていた。

「あ、ごめん...。」

「で？どうしたんだ？」

「あのね、今日は大変だったの。浜で死体を見ちゃって...。」

「ああ、帰ってくる途中に海の方が騒がしかったから、近所の人に聞いたよ。ひまわりがたくさん浮いてたんだらう？」

「うん。ちょうどあの辺りを歩いている時に目撃しちゃって...。」

「そうだったのか。怖かったんだな。」

そう言って、優は小幸の頭をポンポンと撫でてくれた。

昔から小幸は、この兄の手が大好きだった。

高校2年にもなって、清香には「ブラコン」とからかわれるが、それでも、別にかまわないと思っていた。

ちょうどその時、テレビのニュースにあの事件の事が流れた。

『千葉房総 ひまわり殺人事件』

そんな見出しが、テロップに出ている。

被害者は、東京に住む建設会社社長の'木村悟史'という男性で、どこか別の場所で絞殺され、海に投げ込まれたという内容だった。

「まあ、ショックだったとは思うけど、早く忘れるんだよ。小幸が悩むようなことじゃないんだからね。」

「うん...。」

小幸は、海で会ったサーファーの小笠原の事は、なんとなく言わずにいた。

「腹減ったな。飯にしよう。」

サエ子さんの作ってくれたビーフシチューを温めなおし、二人分を皿に盛った。

二十歳になった優は、赤ワインを開けている。

「小幸も早く二十歳になれよ。」

「ちょっとだけ、頂戴？」

「だーめーだ。」

「優くんはお母さんより厳しい...。」

「父さんと母さんから小幸の事をくれぐれも、よろしくって言われてるからな。」

「ふんだ...。」

そう言いつつも、小幸はこんな時間が好きだった。

小幸が高校に入るまでは、母方の祖母が忙しい両親に代わって面倒を見てくれていた。

でも、その祖母も2年前に亡くなり、それからは、兄の優を頼りに生活してきた。

「もうこんな時間か。そろそろ寝ないと。学校も始まったんだしな。」

他愛もない話をしているうちに、夜が更けていた。

「うん、おやすみ。」

そう言って、小幸は自分の部屋に戻った

翌日、小幸はすっきりと目が覚めた。

昨日の事件の事は、優と話した事で、あまり気にならなくなっていた。

朝食を作りキッチンへ下りる。

以前サエ子に「朝食も私が作りますよ。」と言ってもらった事があるのだが、それだけは、小幸は自分でしようと決めていた。

「あ、優くんおはよう。コーヒーでいい？」

「うん、ありがとう。」

サンドウィッチと、オムレツ、ボイルしたウィンナー、サラダを優の前に置く。

「小幸のオムレツもうまくなったよなあ。最初の頃は、オムレツだかタワシだか...。」

「優くん！！」

「冗談、冗談、じゃあいただきます。」

「いただきまーす。」

「小幸、そういえば大学は決めてるのか？星南の大学か？」

「うーん...。まだ。」

「まあ、まだ2年の夏休みが明けた所だしな。もう少しよく考えて決めたらいいよ。」

「うん...。」

将来建築士を目指している優は、工学部の建築学科に通っている。

優は、中学生の頃から'将来は自分で設計した家や、ビルを建てるんだ'と言っていた。

それに比べて、小幸はただなんとなく高校に通っている。

そんな自分も嫌だったが、かといって、将来の道もハッキリと見えない。

そうこうしているうちに、家政婦のサエ子がやってきた。

「あら、お二人とも学校に行く時間ですよ？」

「え！？あ、やばい、行ってきます！！」

二人は慌てて家を飛び出した。

「優くん、じゃあね！」

交差点で駅へ向かう優と別れ、小幸はバス停へ急いだ。

スカートの裾を気にしつつ懸命に走ったが、無常にもバスは小幸を追い越し、バス停を通り過ぎて行った。

「待ってえええええ！」

小幸の叫びが虚しく響く。  
次のバスでは学校に間に合わない。

呆然とする小幸の横に車が停車した。

「乗って。」

「え？」

車の中を見ると、サーファーの小笠原が運転席に座っていた。

「でも....」

「遅刻するぞ、早く。」

そう言われて、小幸は助手席に乗り込んだ。

「もう少しだったんだ。」

「はい、ギリギリでバスに間に合わなくて...。」

「そうじゃなくて。」

「え？」

「もう少しでパンツが見えそうだった...。」

「は!？」

「惜しかったなあ。」

そう言って、小笠原は小幸をみてニヤリとした。

「ちょっと! 降ろして下さい!!」

小幸がドアを開けようとする。

「おいおい、危ないよ、嘘だって! 冗談、冗談!」

「最低!」

「ごめん、本当に冗談だよ。ごめん、もう言わないから。」

「...。」

「今日はあの事件の事でまたこっちに来てるんだ。」

小笠原が話を変えた。

「事件って、あのひまわりの?」

小幸は小笠原の言葉であの死体を見た事を思い出してしまった。

「うん。」

「小笠原さんって刑事さん？」

「いや、違うよ。」

「じゃあ、どうして？」

「うーん。それは今度話すよ。」

「今度って...。」

小笠原の車が校門の前に着いた。

「それじゃあ、またね～」

そう言うと、小笠原はまた海の方へ行ってしまった。

「刑事でもないのに…。なんで。」

小幸は独り言を言って、教室へ急いだ。

「あ、小幸！おはよ。今日はギリギリだね。」

「おはよう、清香。朝のんびりしすぎちゃって。」

とだけ、小幸は言った。

タイミング良く、担任が教室に入ってくる。

「はい、席について。出席を取ります。」

小幸は教室の窓から海を見つめながら考えていた。

東京の建設会社社長がこの海で死体となって発見された。  
死体の周りには無数のひまわり…。

きっと犯人なりのメッセージが込められているんだろう。  
それが何なのかは全然わからないけれど…。

それに、あの小笠原という男。  
偶然遭遇した事件を調べている。正体がわからない、謎の男。

兄の優には'早く忘れるように'と言われたが、なぜか事件の事が気になってしまう。

その日一日、小幸はぼーっとして過ごしてしまった。

「それでね、昨日テレビでさあ、……小幸？聞ってるの？」

「あ、え？なんだっけ、ごめん…。」

「なんだか今日一日中ぼーっとしてるね。」

「うん、ごめんね。」

「じゃあ、私塾だから、先に帰るね。ばいばーい。」

そう言って清香は足早に帰って行った。

小幸も帰り支度をして、学校を出る。

いつもの海岸通り。

そこに、小笠原の姿を見つけた。

小幸の知らない、もう一人の男性と何か話をしているようだ。

「あ、小幸ちゃん！」

小幸に気が付いた小笠原が小幸の名前を呼んだ。

素通りするわけにもいかず、小幸は小笠原たちのもとへ歩いて行った。

「小笠原さん、今朝はありがとうございました。」

「ううん、間に合って良かったよ。」

「シン、お前に女子高生の知り合いがいたとはな。」

小笠原の事を'シン'と呼んだ男が小幸を見た。

「花井、こちらは、武田小幸さん。ほら、事件のあった日、一緒に目撃した女の子だよ。」

「ああ、お前に携帯を貸してくれた子か。」

なんでそんな事を知ってるんだろう、と小幸が不思議に思っていると、小笠原が更にこう言った。

「小幸ちゃん、花井は警視庁の刑事なんだ。で、俺の友人でもある。」

「よろしく。」

警察手帳を小幸に見せながら、花井刑事が言った。

「小笠原さんは刑事さんじゃないんですよね？」

小幸は疑問に思っていた事を思い切って聞いてみた。

「うん、シン...あ、こいつの名前、小笠原新之助って言うからシンって呼んでるんだけど。シンは探偵だよ。」

花井刑事が答えた。

「おい、そんなに簡単に言うなよ。」

小笠原が花井刑事に向かって言う。

「一応俺の仕事は秘密裏に行われるものなんだ...。」

「探偵さんだったんですか。」

小幸は少し驚いて小笠原を見た。

「うん...。まあ。」

「小笠原には時々捜査に協力してもらっているんだ。だから、今回のひまわりの事件にもね。」

「へえ。」

「小幸さんももし、何か気が付いた事があれば連絡してほしい。」

そう言って、花井刑事が名刺を差し出した。

「あ、はい…。わかりました。」

そう言いつつも、小幸は自分には全く関係ない事件と思っているので、連絡する事はないだろうな、と思った。

「それじゃあ、私帰ります。」

「ああ、うん、引きとめて悪かったね。」

「いえ…。」

海岸通りから、バス停に向かう途中にファーストフードのAPPLE HOUSEがある。

この日、古典の宿題が出ていたので、小幸はAPPLE HOUSEでやる事にした。  
自宅に帰っても、優はまだ帰宅していないだろうし、サエ子は今日は昼までしかいないと聞いていたからだ。

「いらっしゃい、小幸ちゃん。今日はひとり？」

「店長、こんにちは。今日はひとり。」

店長の吉田は、以前別の場所でパン屋を営んでいたらしいが、海好きが高じて、2年ほど前、この土地にファーストフードの店をオープンさせた。

50歳近いと思うのだが、独身らしい。

古典の教科書と提出用のプリントを開く。

小幸が用紙に書き始めてしばらくすると、小笠原と花井刑事がAPPLE HOUSEに入ってきた。

（あら...また会っちゃた。）

小幸は心の中でそんな事を思いながら、できるだけ顔を合わさないように教科書に必要以上に顔を近付けた。

ただの聞き込みかな？と小幸は思っていたが、どうやらこの店で休憩をとる事にしたらしい。

花井刑事が小幸に気が付いた。

「あれ？また会ったね。」

小笠原もこちらを振り向く。

「ほんとだ、小幸ちゃん。宿題？」

「え、ええ、まあ。」

小幸はそんな答え方をした。

何故か二人が小幸のテーブルに着いてハンバーガーを食べ始めた。

(なんでここに座るの...)

小幸は何も言わず、プリントに視線を戻した。

「そこ、ちょっと解釈が違うんじゃないかな。」

花井刑事が急にそんな事を言ったので、小幸は始め自分が言われているとは気が付かなかった。

「惜しいんだけどね。」

「え？」

小幸が花井刑事の顔を見ると、

「この部分。」

そう言って、花井刑事は小幸のプリントを指差し、一気に解釈を話し始めた。

突然の事に小幸がキョトンとしていると、

「おい、花井、小幸ちゃん困ってるだろう。」

小笠原がそう言って、笑った。

「あ、ごめんごめん、つい...。」

「小幸ちゃん、花井はね、中学の時からトップで、勉強だけはできるやつだよ。だから、分からない所があったら何でも聞いたらいい。」

「シン、勉強だけってなんだよ。失礼だな。」

「国家公務員1種だって、受かったはずなんだ。それなのに、現場の刑事をやってる。」

「俺はキャリアみたいなのはイヤなんだ。」

そんなやりとりを小幸は不思議な気持ちで眺めていた。

その後も花井刑事の助けを時々借りて、小幸は古典の宿題を完成させた。  
小笠原と花井刑事の無駄なやりとりが合間に入った為か、外は暗くなっていた。

「ありがとうございました！助かりました。」

「どういたしまして。すっかり日が暮れちゃったね。ご両親に連絡しなくて大丈夫？」

花井刑事が心配そうに聞いたので、

「あ、父は海外ですし、母はほとんど仕事でいないんです。」

「え？じゃあ一人？」

「いいえ、20歳の兄がいます。あと、お手伝いさん。今日はもう帰ったと思いますけど...。」

それを聞いた小笠原が、

「小幸ちゃんはお嬢様なんだな。」

そんな風に言った。

「お嬢様じゃないですけど...。」

小幸は下を向いてそう答えた。

「シン、もう暗いし送ってやれよ。俺はこのまま警視庁に戻る。」

花井刑事が言った。

「え？大丈夫ですよ。まだバスもあるし...。」

「大丈夫、シンは軽く見えるけど、安心できるやつだよ。刑事の俺が保証する。」

「あ、別にそういう意味じゃなくて...。」

小幸は花井刑事に心を見透かされた気がして、赤くなってしまった。

「じゃあ、またな。」

花井刑事は小幸の返事が聞こえたのか、聞こえなかったのか、笑顔を向けて、先に店を出て行ってしまった。

「小幸ちゃん、俺たちも行こうか。」

小笠原が席を立ち、小幸もそれに続いた。

APPLE HOUSEの店長の吉田が、

「あれ？小幸ちゃん、彼氏？気を付けて帰ってね。」

そう言って、ニヤッとしたので、

「ちちちち、違います！！！」

小幸は慌てて否定して店を出た。

「さ、乗って。」

「すみません、朝も乗せて頂いたのに...。」

「いいんだよ。俺たちが引きとめちゃったみたいなものだから。」

小笠原が助手席のドアを開けてくれたので、小幸は素直に従った。

「小幸ちゃんは、よくあの店で勉強してるの？」

小笠原が急にそんな事を聞いた。

「え？はい、家に帰っても誰もいないし、時々APPLE HOUSEで試験勉強をしたり、課題を終わらせたり...。」

「へえ。そうなんだ。あそこのハンバーガーうまいもんな。」

「そうなんです。だから太っちゃうかも...。」

「女の子はすぐにそういう事気にするんだよな。」

「やっぱり細い方が可愛いし...。」

「そう思ってるのは女の子だけ。」

そんなやりとりをしているうちに、小笠原の車が小幸の自宅前に着いた。

「うへ～。豪邸だな。...じゃあ、おやすみ。」

小幸は助手席から降りて、車の中の小笠原に、

「本当にありがとうございました。おやすみなさい。」

そう言って、車が角を曲がるまで見ていた。

玄関に入ろうと家の方を向くと、兄の優が玄関の外に立っていた。

「優くん！！」

「おかえり。遅かったな。」

「あ、うん、ごめんなさい。APPLE HOUSEで勉強してた...。」

「で？あの男は？」

(やっぱり見てたんだ...。)

そう思って小幸が口を開こうとすると、

「彼氏か？」

先に優が言った。

「ち、ちがうよ！！」

「まあ、入れよ。飯待ってたんだ。」

「そうなんだ…。ごめん。」

サエ子の準備してくれた夕食を、優は黙って温めなおしている。

「優くん...。」

「ん？」

「あの人は、探偵さんだよ。」

「探偵？」

「ほら、あのひまわりの事件を調べてるんだって。」

小幸は、事件を目撃した時に、携帯電話を小笠原に貸した事、その後偶然海で再会した事、刑事の花井の事などを優に説明した。

「まあ、警視庁の刑事が間に入ってるようだし、一通り小幸から話を聞けばもう用はないんだろ？」

優はそんな言い方をした。

「うん、そうだよ。」

小幸がそう返事をする、優は小幸の前に料理を置いた。

「ありがとう。」

「今度からは遅くなる時には連絡しろよ。心配するだろ。」

「わかった。ごめんね。」

小幸が謝ると、いつもの優の笑顔に戻った。

その日は朝から雨だった。

この日学校が休みだった小幸は、自分の部屋の窓からコンクリートに打ち付けられる雨をじっと見つめていた。

そのコンクリートの道路を、見覚えのある車が海の方へ走って行った。

(小笠原さん...?)

小幸は妙に気になった。

リビングに降りると、優は出かけているようだった。  
サエ子は今日、休みを取っている。

小幸は、靴を履いて外へ飛び出した。

傘に、雨が落ちてくる。  
タイミング良く来たバスに乗り込み、海の方へ向かった。

海が近づくにつれ、パトカーのサイレンの音が大きくなってくる。  
バスを降りると、人だかりができていた。  
制服を着た警察官がロープを張り、野次馬が入れないようにしている。

小幸はその野次馬をかきわけるようにして、前へ出た。

花井刑事と、小笠原の姿が向こうに見える。

小幸はしばらく、何もする事が出来ず、ブルーシートで覆われた何かを見つめていた。

雨だからか、見ていても仕方ないと思ったからか、野次馬はどんどん減り、ついには小幸だけがそこに残っていた。

しばらくして、小笠原が小幸に気が付いた。

「あれ？小幸ちゃん！？」

「小笠原さん...何があったんですか？」

「ああ、うん。また死体が見つかったんだよ。」

そう言うと、小笠原は、親指で現場の方を指差した。  
シートに覆われた遺体が運ばれるところだった。

「そうなんですか...。」

「小幸ちゃんは、どうしてここに？今日は学校休みでしょう？」

「あ...、あの...。」

小幸が返答に困っていると、花井刑事が小笠原を呼んだ。

「あ、ごめん、ちょっと待ってて。もうすぐだから。」

「え？あの...。」

小幸の返事を待たずに、小笠原はまた現場の方へ行ってしまった。

小幸は、その場でただ、立って待っていた。  
いつの間にか雨が止んでいる。

小笠原が小幸の方へ走ってやってきた。

「ごめんね、待たせて。」

「いいえ、あの...もういいんですか？事件の方は。」

「うん、あとは警察の仕事だよ。」

「また死体が出たって...。」

「うん、ちょっとどこかに入ろうか。お昼食べてないでしょう？」

「あ、はい...。」

二人は、海辺に立つ洋食屋に入った。

ランチセットを2つ注文して、小笠原が話し始めた。

「また、ひまわりなんだよ。」

「え？」

「遺体のそばに、無数のひまわりの花があった。」

「じゃあ、前と関連した事件ってことなんですか？」

「おそらくね。」

ウェイトレスがランチセットのサラダを運んできたので、小笠原は事件の話をするのをいったん止めた。

「小幸ちゃんは、どうしてあそこに？」

「あ、あの...私の部屋の窓から小笠原さんの車が見えたんです。海の方へ走って行くのが...。」

「ああ、そうだね、東京からだど、小幸ちゃんの自宅の前を通る。それで、追いかけてきたの？」

「ええ、まあ...。」

小幸は、なぜ自分がそんな行動をとったのかうまく説明できず、下を向いてしまった。

テーブルに洋食のランチセットが運ばれてきた。

「とにかく食べようか。腹減ったよ。」

「いただきます。」

デミグラスソースの美味しいハンバーグを食べながら、小笠原がまた事件の話 시작했다。

「すぐにニュースになるから、言ってもいいと思うけど、今回の被害者はまた東京の人間でね、吉岡久美子っていう、元区議会議員をしていた女性だよ。絞殺されて、あの海岸に運ばれたらしい。そして、遺体のそばには、またたくさんのひまわりが置かれていた...。」

「そうなんですか...。じゃあ連続殺人？」

「そういうことになるだろうなあ。」

レストランの窓から空を見ると、雲の切れ間から太陽が顔をのぞかせていた。

「今日は、この後時間ある？」

ふいに小笠原からそう言われて、小幸は、

「え？」

と言ってしまった。

「いや、用事があるならいいんだけど...ちょっと行ってみたい所があって。」

「用事はないですけど...どこに行きたいんですか？小笠原さん。」

「シンでいいよ、小笠原新之助で、シン。」

「でも...じゃあ、'新之助さん'でいいですか？」

「うん、それでいいよ。じゃあ、行こう。」

新之助はさっさと会計を済ませて、レストランを出て行った。

小幸は、車の助手席に乗り込み、シートベルトを締めた。

海岸線を新之助の車が走る。

小幸は黙って、乗っていた。

数十分走って到着したのは、観光地としても有名な水族館だった。

「ここですか？」

「うん、イルカのショーが見たいんだよ。」

「え？イルカ？」

新之助は少し恥ずかしそうに、

「イルカの目って可愛いだろ？」

と言った。

小幸は、小さい頃、何度かこの水族館に来たことがあった。  
両親と兄の優と、4人で来た思い出がよみがえってくる。

思わず、小幸の口から

「懐かしい...。」

という言葉が出ていた。

「ご両親と離れていて寂しい？」

新之助が小幸に聞いた。

「そうですね、今はもう私も高校生だし、兄もいるし、両親の仕事のことを理解してるつもりですけど、やっぱり数年前までは少し寂しい思いもしていました。でも、父のことも母のことも尊

敬しています。」

「小幸ちゃんは良い子だね。」

久しぶりに'良い子'なんて言われて、小幸は少し恥ずかしかった。

イルカのショーまでは、まだだいぶ時間があった。

「中を見て回ろう。」

水族館は、淡水魚から、深海魚まで、多数のコーナーでできていた。  
ペンギンや、ラッコもいる。

大水槽の前のベンチに少し座ることにした。

「飲み物を買ってくるよ。」

そう言って、新之助は売店の方へ走って行った。

小幸は、こうして新之助と二人で水族館に来ている事に少し不思議な気持ちを覚えつつ、でも嫌ではないな、という気持ちにも気が付いていた。

数分して、新之助が紙のカップを二つ持って帰ってきた。

「おまたせ。はい、どうぞ。」

「ありがとうございます。」

「こうやって、ただ魚が泳いでいるところを見るのが好きなんだ。何時間でも見ていられるよ。」

新之助がそんな事を言った。

その言葉通り、新之助は一言もしゃべらずに、じっと水槽を見つめていた。

大小様々な魚が、それぞれ好きなように泳いでいる。

この限られた空間の中でも、自由を見つけるために、一生懸命泳いでいる、そんな感想を持った。

新之助の横顔を見してみる。  
瞳に水槽のブルーが映っている。

新之助の整った顔立ちに、優しい表情が浮かんでいた。

急に新之助が小幸の方を向いたので、目が合ってしまった。

「あっ...。」

「どうしたの？もうすぐショーが始まるよ、行こうか。」

「はい...。」

小幸はそう言って、目をそらし、新之助について行った。

イルカショーの会場までは、外を少し歩くようになっていた。

しばらく歩くと、丸いイルカ用の水槽が見えてくる。  
土曜日だから子連れが多い。

空いている席を見つけて、新之助と小幸も腰かけた。

軽快な音楽とともに、イルカが隣の水槽から泳いでくる。

ベテランと見える女性スタッフの合図に合わせて、ジャンプしたり、手を振る真似をしたり、その度に拍手が起こる。

小幸も童心にかえって、夢中で見ていた。

女性スタッフが、

『イルカと握手してみたい方はいませんか？いましたら、ぜひ、手を挙げて下さい。』

と言い、子供たちが一斉に手を挙げる。

子供数名と、カップル、そして、なんと小幸が選ばれた。

「お、小幸ちゃん、いってらっしゃい。」

新之助にそう言われて、小幸はステージへ下りて行った。

合図に合わせて、イルカが水面から顔を出し、握手ができる。

子どもたちは嬉しそうに、イルカと握手している。

小幸の番になり、女性スタッフが右手を振り上げた。  
それと同時に、イルカが小幸のそばに顔を出し、小幸の手と、イルカが触れた。

その時、小幸の足元が滑ってしまい、危うく転びかけたが、女性スタッフが咄嗟に支えてくれたので、転ばずに済んだ。

「す、すみません！！」

小幸は女性スタッフにそう言い、頭を下げた。

「いいえ、大丈夫ですか？足元が滑りますので、気を付けて下さいね。」

女性スタッフは優しくそう言い、小幸から腕を離した。

その時、支えてくれた女性スタッフの腕に、古い大きな傷があるのを見た。

ショーが次へ進んだので、小幸はそのまま自分の席へ戻った。

「大丈夫？危うく水槽に落ちるところだったね...ひやひやしたよ。」

新之助にそう言われ、

「はい、大丈夫です。近くで見るイルカは可愛かったですよ。新之助さんも選ばれれば良かったのに。」

そう、答えた。

ショーはクライマックスを迎え、次々とイルカたちが大ジャンプを決める。

客席からは割れんばかりの拍手が送られた。

そして、イルカショーは終わった。

「久しぶりに見て、感動しました。」

小幸が新之助にそう言うと、

「俺も。やっぱり可愛いなあ。でも小幸ちゃんが水槽に落ちそうになった時は本当にびっくりしたよ。落ちなくて良かったよ。」

「スタッフの人が支えてくれたから...。そういえば、あの人、腕に大きな傷がありました。古いものみたいだけど...。」

「腕に傷？」

「はい、右の手の甲から腕にかけて。長袖を着ていたんですけど、私を支えてくれた時に服がめ

くれたので、チラっと見えたんです。」

「そう。」

とだけ新之助は答えた。

「さて、イルカショーも見ることが出来たし、ドライブでも行こうか。」

新之助が急にそう言ったので、小幸も思わず

「そうですね。」

と答えていた。

（「そうですね。」っておかしかったかな...）

しかし、新之助はそんな事は気にしない様子で、車へと向かった。

新之助の車が海沿いを走り、少し高台になった場所で停まった。

「ここは...？」

地元で育った小幸も知らない場所だった。

「九十九里にはよくサーフィンで来てるんだ。ここは偶然見つけたんだよ。...そろそろだな。」

「そろそろ？」

昼までの雨が嘘のように上がり、街が赤く染まり始めていた。

「ほら、あっち。」

新之助が指差した方を見てもみると、

「わあ！富士山！！」

富士の綺麗な山の形が茜色の空にくっきりと浮かんで見えた。

「なかなかの景色でしょう？」

「ほんと…。きれい…。」

「この色の富士山が見えるのは、晴れた日のこの時間帯だけだよ。」

「知らなかった…。」

小幸はしばらくその富士を眺めていた。

新之助も隣で黙って見ている。

そのうちに、茜色の空はだんだんと色を落とし、やがて辺りは暗くなった。

「本当に短い時間なんですね。」

「うん。」

新之助はそう言って、小幸を見つめた。  
小幸は恥ずかしくなって視線を逸らしてしまった。

「...送るよ。...足元危ないから。」

新之助が、右手を差し出した。  
小幸は黙って自分の手を差し出された手に重ねた。

坂道を降りても、新之助は手を離さない。  
小幸は胸のドキドキが新之助に聞こえてしまうのではないかと、不安だった。

「あ、ごめん。」

車の前で、新之助が慌てて手を離した。

「い、いえ...。」

新之助も、小幸も無言のまま車に乗り込み、会話のないまま、小幸の自宅に到着した。

「今日はありがとう。楽しかったよ。」

「私も…。ありがとうございました。それじゃあ…。」

そう言って、小幸は駆け足で家に入ってしまった。

新之助が車をスタートさせた音が聞こえる。

小幸はしばらく玄関に突っ立ったまま、動けなかった。

兄の優が帰宅していない事に、なぜかホッとしながら。

警視庁捜査一課はこの事件を

「九十九里浜における、ひまわり連続殺人事件」

として、捜査に当たっていた。

被害者が二人とも東京の人間という事で、千葉県警に捜査協力依頼をされていた。

刑事の花井は同僚と一緒に、上司の田所捜査一課長にこれまでの経緯を説明した。

「それで？被害者二人の接点はまだわからないのか？」

「はい、今の所同じ東京の人間である、という事以外に接点は見つけれません。」

「でもこれは、連続殺人とみているんだろう？」

「はい、それは間違いないと思っています。」

花井が田所に向かってそう言うと、

「遺体のそばにひまわりがあったからか？元都議の吉岡久美子の事件は、はじめの事件を真似た全く別の事件かもしれないぞ？」

「それは...可能性としてはあるかもしれませんが。しかし、私は連続殺人事件であると、思っています。」

「まあいい。それなら早く二人の接点を見つけるんだ。」

「はい。」

花井は捜査一課を出ると、新之助に電話をかけた。

「もしもし？シン。今から時間あるか？」

『じゃあ、昼飯おごれよ。』

「...わかったよ。じゃあいつもの定食屋で。」

『OK。』

電話を受けて、新之助は駅前の定食屋に向かった。

花井は、先に来ていた。

新之助は、花井に、

「何か進展あったか？」

と聞いた。

「色々捜査しているが被害者二人の接点がどうしても出てこない。」

「そうなのか。」

「そっちは？」

今度は花井が新之助に聞いた

「少し気になる事が出てきてるけど...。まだ何とも言えないな。」

「なんだよ、気になる事って。」

「もう少し待てよ。まだ確信が持てないんだ。」

新之助が注文した唐揚げ定食を頬張ると、花井が急に話題を変えた。

「それで、小幸ちゃんだっけ？そっちは？」

新之助は唐揚げを吹き出してしまった。

「きたねーな。」

そう言って、花井が笑う。

「だって、お前が突然そんな事言うから。」

むせながら新之助が答える。

「可愛い子だったじゃないか。シンの好みと見た。」

「...。」

「なんだよ、今回はガンガンいかないのか？シン、お前らしくないな。」

「失礼だな。」

「まあ、相手が高校生で未成年だしな。」

「人を犯罪者みたいに言うな。」

「俺は刑事だからな。」

新之助は残りの唐揚げを口に放り込んだ。

「冗談はこれくらいにして。」

花井刑事が真面目な顔で続けた。

「気になる事があるって言ったな。何かわかったら、知らせてくれよ。俺の上司もシンの事を公には言っていないが、認めている。暗黙の了解ってやつだ。」

「それはどうも。...じゃあ、ご馳走様。」

「もう行くのか？」

「気になる事を放っておけない性質なんだよ。」

「...小幸ちゃんの事か？」

花井刑事がまた茶化すように言った。

「...。捜査協力やめるぞ？」

「ごめんごめん、じゃあよろしく。」

花井刑事を店に残して、新之助は車に乗り込んだ。

向かった先は千葉・九十九里。

新之助は、東京で調べるよりも、手掛かりは九十九里にあると思っていた。

海水浴シーズンの休日には大渋滞にもなる高速道路が、今はほとんど車の通りがない。

趣味のサーフィンの為、何度となく走っている道である。

(こんな事件の為に通る事になるとはな...。)

新之助はそんな事を考えながら車を走らせていた。

現場に着く少し前に、小幸の自宅前を通る。

(今日は学校だな。それにしてもデカイ家だ。)

そう思って小幸の自宅を見ると、若い男性が玄関から出てくるのが見えた。

(あれが小幸ちゃんの...お兄さんだな。)

新之助はそのまま第一の現場へ向かった。

ひまわりの中心にあった遺体。

沈まないように、花の中心に来るように、きちんと紐でくくりつけられ、漂ってきた。

犯人なりのメッセージを感じる。

それも、かなり強い思いが込められている、新之助はそう思っていた。

(しかしあのひまわりと遺体はどこからやってきたんだろう...。)

それは、警察もまだ捜査中と話していた。

新之助はまた車に乗り込み、付近の海岸線を調べてみた。

その一角に、一軒の旅館のような建物がある。

しかし、今は使われていないと見えて、柱の一部は剥がれているし、庭の雑草は伸び放題だ。

'つる屋'という錆びれた看板が落ちかけている。

入口にはフェンスが立ててあって、「立入禁止」の看板がくくりつけられていた。

その時、釣り竿を持った男性が新之助の方に、歩いてやってきた。

「あんたも釣り？」

男性にそう言われ、

「釣り？」

と新之助が聞き返すと、

「この裏でさ。」

そう言って、男性は旅館を指差した。

「この裏で釣りをするんですか？」

「なんだ、あんたは違うのか。ここは一応立入禁止って事になってるんだけど、釣り好きなやつはみんな入ってやってるよ。よく釣れるんだ。」

「僕も入って構いませんか？」

「俺の土地じゃないし、断る理由はないよ。」

そう言って、男性は笑った。

男性は慣れた感じでフェンスをよじ登り、旅館の裏へ歩いて行く。

新之助もそれに続いた。

旅館の裏手に行くと、なるほど、地形が海へ張り出したようになっており、釣りをするには恰好の場所となっていた。

「とてもよいロケーションなのに、潰れてしまったんですね。」

新之助が男性にそう聞くと、

「経営してた夫婦が年取って辞めたのさ。跡を継ぐ者がいなくて、閉めたって話だよ。」

「そうなんですか。もったいないな。」

男性は釣り竿にエサを付けながら、

「もうすぐ新しいホテルが建つらしいけどな。」

と言った。

「新しいホテル？」

「そうになったら、釣りはできなくなるなあ。」

男性はそう言って煙草に火をつけた。

新之助は改めて辺りを見渡してみた。

ここにホテルが建てばきっと流行るだろう。海は目の前だし、温泉も出るらしい。

その時、新之助の携帯電話が鳴った。

花井からだ。

「もしもし？」

『シン、ひとつわかった事がある。』

「なんだ？」

『九十九里に新しく出来るホテルを、一人目の被害者、木村悟史が社長をしている建設会社が施工する事になっている。』

「...なるほど。'つる屋'っていう旅館の跡地か？」

『なんだ、知ってるのか？どうして？』

「今、偶然そこに居る。」

『すぐにそっちに行く。俺が到着するまであのハンバーガーショップで待っていてくれ。』

そう言って、電話は切れた。

「調べろって言ったり待ってろって言ったり、勝手だな、あいつは。」

新之助は独り言を言って、'つる屋'を離れ、花井の到着まで、APPLE HOUSEで待つことにした。

平日の昼間のハンバーガーショップは空いていた。

新之助は、コーヒーだけ注文して、自分の手帳に今までわかっている事を書いた。

わかった事実と、自分の推理に考えを巡らせてみる。

(やっぱり被害者二人の接点が見つけれないと...。)

新之助は手帳を閉じた。

1時間半ほどで花井がやってきた。

「悪い、待たせたな。」

「いいよ、待つのに慣れてる。」

「じゃ、行くぞ。」

「どこに？」

「'つる屋'の元女将の所さ。この近くで隠居生活を送っている。」

新之助は黙って花井について行った。

海岸から少し上がった所に、鶴野家はあった。

呼び鈴を押すと、年老いた女性が出てきた。

「鶴野トキさんですか？」

「はいはい、そうですが？どちらさまでしょう？」

「突然で申し訳ありません、警察の者です。」

そう言って、花井は警察手帳をトキに見せた。

「あらまあ、警察の方がどうしてうちに？...まあとりあえず上がって下さいな。狭い所ですが。」

二人は居間に通された。  
仏壇に線香と花が供えられている。

「ご主人ですか？」

花井がトキに聞いた。

「ええ、3年ほど前に亡くなったんですよ。海に落ちてしまってね...。」

「そうなんですか...。」

トキは、夫の遺影から花井に向き直って、

「ところで、今日はどんな御用ですか？」

と聞いた。

「はい、'つる屋'の事です。」

「あそこはもう辞めましたよ。」

「それは、知っています。辞めた頃のお話を伺いたいです。」

「辞めた頃？」

「辞められたのはご主人が亡くなった後ですね？」

「ええ、主人が亡くなってしまって、私も年を取りましたし。それにうちの息子たちはサラリーマンなんです。だから継ぐ者もいなくてね。いっそ売ってしまって、隠居しようって決めたんです。色々な思い出はありますがね、無理してダメになっていくのもどうかと思ったんです。」

「そうだったんですか。それで、あの土地を売るという話はすぐにあったんですか？」

「あの土地を買いたいという人は、主人が亡くなる前からあったんですよ。あそこは場所がいいし、温泉も出るんです。」

「そうですね、僕もここへ来る前に見てきましたが、とてもよいロケーションでした。」

今度は新之助がトキに言った。

「主人が亡くなって、これはもう続けられないなと思った時に、お話を下さっていたリゾートホテルの会社に決めたんですよ。」

「木村悟史という人間を御存じですか？」

花井は急に話題を変えた。

トキは、

「きむら？」

と花井に聞き返した。

「そのリゾートホテルの施工を担当する予定の建設会社の社長ですよ。」

「その方は知りません。私はリゾートホテルを経営する会社の担当の人としかお話ししていませんから。」

「そうですか。木村悟史というのは、先日海で殺されていた男性です。ひまわりの...。」

「まあ、あの事件の被害者の方が、その建設会社の社長さんなんですか？」

「そうです。」

「あらまあ...。そうだったんですか。知らなかった。じゃあ、ホテルの建設はどうなっちゃうんでしょうね？あそこを売ってからもう2年も経ってますよ。」

「その話は、進んでいると思います。社長が亡くなってからも副社長が社長業を引き継いで、会社は動いていますから。」

「そうですか...。」

新之助は壁に掛けられた1枚の写真に目をとめた。  
男性が、白い布を着て、海の前に立っている写真だ。

「この写真は？」

とトキに聞いた。

トキは写真を見ながら、

「ああ、これは主人の若い頃の写真ですよ。主人は旅館をする前は男海士だったんです。」

「おとこあま？」

「普通は海女と言えば女性ですけどね、男性の場合男海士と言うんですよ。今はウエットスーツを着るんだらうけど、この時代は、こういう白い磯着で潜っていたんですよ。」

「海士さんをしていたなら、泳ぎは得意だったんじゃないんですか？」

花井が聞いた。

「そうなんです。なのにあの人は海にのまれてしまったんです。でも、あれだけ海を愛していたからねえ。海で死ぬことができ、幸せだったのかもしれないね。」

トキは最後は遠くを見るようにして言った。

二人はトキに礼を言って、鶴野家を後にした。

「シン、リゾートホテルが建つ場所に行ってみたいな。」

「わかった。すぐ近くだよ。」

二人はつる屋に向かった。  
まだつる屋がそのまま建っているのを見て、花井が、

「工事はまだ始まってないのか？」

と言った。

「ここによく釣りに来ているという人に聞いたら、今年中には始まる予定だって聞いたけどな。」

「そうか。」

花井は、そう言うと、あちこち見て、新之助の所に戻ってきた。

「花井、やっぱり被害者二人の接点を見つけないと、話が進まないぞ。」

「わかってる。調べてるよ。上司は、連続殺人に見せかけた別々の事件なんじゃないかって思ってるみたいだ。」

「いや、これは連続殺人だよ。」

「俺もそうだと思ってる。花井、俺はもう少し調べたい事があるんだ。」

「ああ、悪かったな。頼むよ。」

そう言って、新之助は車が置いてあるAPPLE HOUSE横の駐車場まで花井に送ってもらい、別れた。

小幸は学校からの帰り道、同級生の和泉健太と海岸沿いを歩いていた。  
健太とは、自宅も近所で、幼稚園からずっと一緒の幼馴染だ。  
高校に入ってから、こうして一緒に帰る事はなくなったが、今日はたまたま校門の前で一緒になった。

APPLE HOUSEの前までくると、新之助の姿が見えた。

なんとなく、健太と一緒にの所を見られたくなかった小幸は、長身の健太の影に隠れるようにしてバス停に向かった。

「こうやって二人で歩くのは久しぶりだな。」

健太が言った。

「そうだね、だってケンちゃん、モデルの仕事の方が忙しいんでしょう？」

健太は、学業の合間にモデルの仕事をしている。

「そうなんだよ。そっちの仕事が増えてきちゃってさ、学校も休んだり、早退したり。理解のある学校で良かったよ。」

健太が言う。

「留年しても知らないから。」

そう言って、小幸が笑った時、新之助がこちらを見ているのに気が付いた。

健太も新之助に気がついて、

「小幸、あの人知り合い？」

と聞いた。

「あ、うん。」

とだけ答えて、小幸は新之助に会釈をした。

すると、新之助がこちらに向かって歩いてきた。

(な、なんで...)

小幸がビックリしていると、新之助がいきなり、

「やあ、小幸ちゃんこんにちは。こちらは彼氏？」

と聞いてきた。

「ち、違いますよ。ケンちゃん、あ、彼は和泉健太っていうんですけど、彼とは幼馴染で、同級生です。」

「そうなんだ、彼氏じゃないのか。じゃあ、ちょっと付き合ってもらっても構わないかな？」

「ど、どうしたんですか？」

「いいから、いいから。じゃあ、和泉君、またね。」

そう言って、新之助は、小幸の腕をグイグイ引っ張って、自分の車まで連れてきた。健太は茫然としてそんな二人の後ろ姿を見ていたが、バスが来たので、そのまま一人で乗ってしまった。

「ちょ、新之助さん！痛いですよ！」

「あ、ごめん...。」

新之助がやっと腕を離してくれた。

「いきなりどうしたんですか？」

「どうしちゃったんだろうな、俺。」

答えになっていない答えを言い、新之助は助手席を開けた。

「どこに行くんですか？」

小幸が聞くと、

「ごめん、家まで送るよ。」

とだけ言って、無言で車を走らせた。

小幸もそんな新之助の態度になんと言っていていいか分からず、黙っていた。

やがて自宅の前に着いても特に何も話す事もなく、車を降り、礼だけ行って別れた。

(なんだったの...。)

首をかしげて、リビングに入ると、外からパトカーや救急車のサイレンがけたたましく響くのが聞こえた。

「小幸さん、お帰りなさい。...また何かあったんですかね？」

キッチンにいたサエ子が出てきて、窓の外を覗いている。

何台ものパトカーが海の方へ走って行くのが見えた。

「そうですね...。」

とだけ言って。小幸は自分の部屋に入り、教科書を広げた。

しばらくして、兄の優が帰宅した。

「優くん、お帰りなさい。あれ、サエ子さんは？」

「もう帰ったみたいだよ。」

「そう。」

「...また、ひまわりの事件があったらしい。」

優がふいに言った。

「え？ そうなの？ 学校から帰ったらパトカーがすごかったから、何かあったのかとは思ってたんだけど...。」

「うん、男の人が刺されていて、またひまわりが周りに置かれていたらしいよ。」

「そうなんだ...。」

小幸が暗い表情をすると、優が慌てて、

「あ、ごめん。小幸にこんな事話しても仕方ないよな。悪かった。」

「ううん、きっとニュースでもやるだろうし。」

その言葉の通り、夜のニュースで事件の事が報道された。

3番目の被害者は、ホームレスだった。

1人目、2人目と違い、絞殺ではなく、刃物で刺殺されたという事、被害者がホームレスだという事で、これは2つの事件を真似た模倣犯ではないか、と報道する番組もあった。

「よくわからない事件だな。」

優はサエ子の作った夕食を食べながらそんな事を言った。

その時、リビングのドアがいきなり開いた。

優と小幸が驚いて見ると、そこに母が立っていた。

「お母さん！」

「おふくろ！」

二人は同時に叫んでいた。

「どうしたんだよ、急に。まだ帰る予定じゃなかっただろ？」

「あらまあ、久しぶりに会う母親に対してずいぶんね。」

「お母さん、どうしたの？」

今度は小幸が聞いた。

すると母はテレビを指差し、

「変な事件が続いているでしょう？心配で帰ってきたのよ。」

「へえ。母親らしい事を言うんだな。」

優が冗談交じりに言うと、

「当たり前でしょう。こんな事が続いたら誰だって心配するわよ。」

と母は言った。

夕食をつまみながら、母は、

「どういう事なのかしらねえ？」

と繰り返し、ニュースを見ていた。

子供の頃のように、寂しくはなくなったが、食卓に母がいる事を小幸は素直に嬉しいと感じた。

優もいつもよりお喋りになっている気がする。

「でも、明日には仕事に戻るわよ。」

母がまた急に言った。

「そうなんだ。」

小幸が寂しそうに言うと、

「ごめんね、札幌に新しく支店を出すのよ。」

「そう。」

「でも、それが落ち着けば、しばらく自宅から仕事に通えると思うわ。」

と、付け加えた。

「そうなの？」

小幸は今度は嬉しそうに言った。

「その予定。」

その後は、学校の事、普段の何気ない事を母と話し、いつの間にか夜が更けていた。

翌日、目を覚ますと母がキッチンで朝食を作ってくれていた。

「小幸、おはよう。早いよね。」

「お母さん、朝ご飯作ってくれたの？ありがとう。」

「普通のお母さんはこんな事当たり前なのよね。ありがとうなんて、言ってもらえないのよね...。」

と言った。

最近ほとんど母の料理を食べた事がなかった小幸だが、母は昔から料理が上手かった。

「これでお父さんの胃袋をつかんだのよ。」

と、いつも母は口癖のように言っていた。

その日の朝食も、小幸の作るトーストと玉子だけの料理とは違い、旅館の朝食のような和食だった。

母が作った卵焼きを食べる。  
ほんのり甘みのある、出汁巻き卵。

「おいしい...。」

「あら、良かったわ。優、おはよう。」

兄の優も起きてきた。

「なんだか味噌汁のいい匂いがしたんだ。」

優の朝食も食卓に並べられた。

「準備をしたら、私は出るわね。」

母はそう言って、慌ただしく外出の支度を始めた。

朝食を食べ終えた頃、小幸の携帯が鳴った。

着信を見ると、新之助からだった。

母と優の前ではなんとなく気が引けて、小幸は自分の部屋で電話に出た。

「もしもし？」

『小幸ちゃん、おはよう。今小幸ちゃんの家そばにいるんだよ。学校まで送ろうか？』

「え？でも、あの、今日は...。」

『都合悪い？』

「都合悪いとかじゃなくて...。」

『じゃあ、もう着いたから、待ってるねー。』

「え？」

という間もなく、電話が切れてしまった。

窓から外を覗くと、新之助の車が少し離れた所に止まっているのが見えた。

学校の支度をして、リビングに戻る。

「小幸、彼氏でしょう？」

母にいきなり言われた。

「ななな、なにが？」

「さっきの電話よ。」

「違うよ！」

「じゃあ、お母さん、またね。私学校に行ってきます。」

そう言って、慌てて小幸は玄関を出た。

母と優は、そんな小幸の後ろ姿をこっそりと追っていた。  
小幸が新之助の車に乗り込むところを見て、

「優、あの男の人は？」

母が優に聞く。

「あ、あれは探偵らしいぞ。怪しい男だ。」

「そうなの？小幸の彼氏？」

「さあな、でも刑事の友達らしいよ。」

「ふーん。悪い人じゃなさそうね。」

と母は言って、リビングに戻った。

新之助の車内で、ラジオがあこの事件のニュースを伝えている。

「またひまわりの殺人ですね...。」

小幸が言うと、

「その件でまた来たんだよ。」

と新之助が答えた。

「でも、テレビでは最初の2つの事件を真似て、殺したんじゃないかって言ってましたよ？」

と言うと、

「俺は関連があると思ってるよ。」

とだけ、新之助は答えた。

間もなく学校に着く、という所で、新之助が、

「小幸ちゃん、今日の放課後またあの水族館に一緒に行って欲しいんだ。」

と言った。

「またショーが見たいんですか？」

と聞くと、

「ちょっと調べたい事があるってね。それに…」

「それに？」

「デートがしたいんだよ。」

と、新之助が前を向いたまま言った。

「小幸、今日の帰り、APPLE HOUSEに寄らない？」

休み時間、親友の清香が誘ってきた。

「あ、ごめん今日は予定があって...。」

「そうなの？なにになに？まさかデート？」

「...！」

「え、マジで？そうなの？」

「うーん...。」

小幸は新之助の事を清香に話した。

「へー、それで小幸はどう思ってるの？」

「正直、まだわからないの。でも一緒にいるのは嫌じゃないんだ...。」

「それって好きって事でしょう？」

「そうなのかな...。」

あまり恋愛経験のない小幸は、それが恋なのかよくわからなかった。

「まあ、楽しんできてよ。また話聞かせてね。」

「うん...。」

学校の帰り、新之助とは海岸通りで待ち合わせをしていたので、小幸は急いで向かった。

「すみません、お待たせして。」

小幸がそう詫びると、

「ぜんぜん、俺も今来た所だよ。」

と、優しく言ってくれた。  
水族館へ向けて車が出発する。

「調べたい事って？」

と小幸が聞くと、

「あの、イルカのショーにいた女性の事だよ。腕に大きな傷があった人。」

「ああ...。」

小幸がイルカショーで足を滑らせた時に助けてくれた調教師の事だとすぐにわかった。

確かに、腕に大きな古い傷があったのを覚えている。

「あの人が、事件と何か関連があるんですか？」

「それを調べようと思ってね。」

水族館に到着し、料金を払って入場した。

新之助は、イルカの水槽には向かわずに、まず受付の女性に話を聞いた。

「私は雑誌記者をしまして、今色々な水族館について記事を書いているんです。少しお話を伺いたいのですが。」

と新之助が言うと、

「どんな事ですか？」

と受付の一人が聞き返した。

「今回、イルカのショーについて特集を組もうと考えています。イルカの調教って大変なんじゃないかね？」

「そういう事でしたら、そちらの担当に聞いた方が詳しく聞けると思いますけれど。」

と女性はにこやかに答えた。

「なるほど、そうですね。どなたかベテランの調教師さんのお話が聞きたいな。」

「それでしたら、園部さんがいいと思います。」

「園部さん？」

「園部恵子さんという女性なんですけれど、ベテランの調教師です。」

「へー、女性か。それは記事としても面白いな。」

新之助がそう言うと、もう一人の受付の女性が仲間のスタッフに言った。

「でも、園部さんはそういう事をあまりお話しするタイプじゃないわよ。」

「タイプじゃない？」

新之助が聞き返す。

「ええ、確かに腕の良い、ベテランの調教師なんですけれど、なんていうか、皆との輪に入らないタイプなんです。無口というか。」

「へー。そうなんですか。真面目なタイプ？ご家族とかいるのかな。」

新之助が合わせて相槌を打つ。

「お子さんもいなくて、一人暮らしみたいよ。」

「そういえば、十数年前に突然この土地にやってきて、うちに就職したって聞いたわ。」

受付の女性は好き勝手に喋りだした。

「あ、ほら、腕に大きな傷があるじゃない？あれって別れた旦那さんにやられたって聞いた事があるわ。」

それを聞いて、新之助の表情が変わった。

「園部さんという人は、ご主人に暴力をふるわれていたの？」

新之助に聞かれて、女性二人は喋りすぎたと気付いたのか、

「噂ですし...詳しくは知りません。」

と言ったきり、黙ってしまった。

ここではこれ以上話が聞けないと思った新之助は、小幸を促して、中へ入って行った。

「園部さんというのが、あのイルカの調教師さんなんですね？」

小幸が新之助に聞くと、

「そういう事になるだろうね。」

と答えた。

どんどん奥へ進み、イルカの水槽が見えてきた。

ショーの受付で、新之助はまた雑誌記者の振りをした。

「園部さんにお話を伺いたいのです。」

と、新之助が言うと、男性スタッフが、

「園部は、お休みをいただいております。」

と答えた。

「休み？」

「ええ、昨日から2日間。ここは定休日が決まっていませんから、私たちは交代で休みを取りますので。」

と言った。

「なるほど、そうですか。」

とだけ新之助は答えて、その場を後にした。

「園部さん、お休みでしたね。」

そう小幸が言うと、

「うん...。」

と何かを事を考えているような顔で、新之助が答えた。

その後、水族館を後にして、

「どこか行きたいところはある？」

と新之助が聞くので、

「あの富士山がまた見たいです。」

と小幸は答えた。

いつだか新之助に連れて行ってもらった、高台にある場所。

晴れた日の、一時だけ、富士がとても綺麗に見えた。

「よし、行こう。」

新之助はそう言ってまた、車をスタートさせた。

前回来た時と違って、辺りはまだ明るかった。

「夕日まではまだ早かったな。」

高台までゆっくりと登る。

「あ、ひまわり！」

上っている途中に、何本かのひまわりを見つけた。

「この間は、よく見えなかったのかもね。でももう、時期も終わりだな。」

新之助のその言葉の通り、ひまわりの花は真夏に比べ少し元気なく見えた。

「そういえば、昨日うちの母が急に帰ってきたんです。」

小幸が思い出したように新之助に言った。

「え？ そうなの？ じゃあ、今ご自宅に？」

「いいえ、今朝私が家を出た後にすぐ出発するって言ってましたから、今頃北海道だと思いますよ。」

「じゃあ、見られたな。」

「え？ なにを？」

「俺を。」

そう言って、新之助はニヤっとした。

「どういう事ですか？」

「探偵の勤だけど。お母さんは小幸ちゃんが出ていくのを家から見ていたと思うよ。そして、俺の車に乗り込む所もね。朝、電話をかけた時もお母さん傍にいたんだらう？」

「でも、電話は自分の部屋で取りました。」

「それでも、見られたと思うな。親ってというのは、そういうもんだ。」

「そうなのかな...。」

「きちんと迎えに行けば良かったな。ご挨拶もできたのに。」

「挨拶？」

小幸が聞き返すと、新之助は真面目な顔になって、小幸を見つめた。

「小幸ちゃん...。」

じっと見つめられて、小幸はまた目を逸らしてしまった。

「こっちを見てくれないか。」

新之助が小幸に言う。

小幸が新之助に視線を戻すと、

「俺...。小幸ちゃんが好きだよ。」

ひとことそう言って、小幸を抱きしめた。

「新之助さん...。」

小幸も、新之助の背中に腕を回した。  
自分でも、鼓動が速くなっているのがわかる。  
ドキドキして、うまく呼吸ができなかった。

「小幸ちゃん。」

もう一度、新之助が小幸の名前を呼んだ。

「キスしてもいいかな？」

小幸が小さく頷いて、ドキドキが最高潮に達した時、新之助の唇が、小幸の唇に触れた。

ほんの一瞬だったけれど、小幸は自分の唇に、確かに新之助の温もりを感じた。

そして、また、恥ずかしくて下を向いてしまった。

「こっち向いて。」

「私...とてもドキドキしてしまって...。今すごく変な顔をしていると思います...。」

「可愛いよ。」

そう言って、新之助はまた小幸を抱きしめた。

辺りは、いつの間にか赤く染まり始めている。

「ほら、富士山。綺麗だよ。」

新之助にそう言われて、小幸は自分がここに来たいと言った事を思い出した。

赤い空に、くっきりと富士の形が見える。

新之助は、小幸の腰に手を回したまま黙って見ている。  
小幸もまた、黙ってそんな新之助に身をゆだねている。

やがて辺りが暗くなり、富士は見えなくなった。

暗がりの中、新之助がまた小幸の唇に自分の唇を重ねた。

新之助の柔らかいキスで、小幸は体中が火照り、腰が砕けそうになる感覚に陥った。

そんな小幸を新之助は力強く支えている。

二人は長い長いキスをした。

数日後、小幸は親友の清香と東京に来ていた。

「えー！？じゃあ、キスしちゃったの！？」

「しーっ！しーっ！声が大きいよ。」

ウエイトレスが、二人の飲み物を運んできたので、清香は一瞬静かになった。  
ウエイトレスが行ってしまうと、清香はまた興味津々な顔に戻って、

「それで、それで？」

と聞いてきた。

この日は、久しぶりに買い物でもしよう、と清香が誘ってきたのだ。

「それでって…。それだけ。その後会ってないし。」

「そうなの？」

「だって、東京に戻って調べる事があるからって、その日のうちに千葉を出たみたいだから。」

「ふーん。じゃあ、この東京にいるわけだ。」

「まあ、そうだけど。もう、いいじゃない、この話は。」

「もう～。そういう話は楽しいじゃない。」

清香がケラケラ笑って言う。

(まったく...)

そう思って、小幸が何気なく窓の外を見ると、見覚えのある女性が通りを歩くのが見えた。

(あれ...誰だっけ...。)

「...小幸？聞ってるの？」

「あ！あの人だ！」

「え？」

小幸は急に席を立て、手早く会計を済ませて外に飛び出した。

「ちょっと、小幸？どうしちゃったの！？」

慌てて清香が付いてくる。

小幸は、そんな清香に構わず、辺りを見渡した。

「どこ...？」

通りの向こうに、目的の後ろ姿を見つけた。  
急いで後を追う。

「ねえ、小幸ってば！！どうしたのよ？」

「ごめん、ちょっと一緒に来て。」

それだけ言って、小幸はどんどん歩く。  
やがて、閑静な住宅街に入った。

「なんだかすごい高級住宅街だね。」

清香が感心したように言った。

女性が、ある豪邸の前で立ち止まった。

電柱の陰に隠れて、その家を見張っているように見えた。

小幸と清香も、少し離れて、女性を見守った。

「誰なの？」

清香が小声で聞く。

「水族館のイルカの調教師。」

「イルカの？」

(確か、名前は...園部恵子...。)

「あの豪邸を見張ってるみたいだね？」

「うん...。誰の家なんだろう...。」

しばらく、女性は動かなかった。

小幸がもう帰ろうかと思ったその時、恵子が見張っている家の主人が帰宅したのか、ガレージの門が開いた。

やがて、高級車そのガレージに吸い込まれるように入った。  
恵子はじっと、その様子を見つめている。

そして、ガレージの門が閉まると、恵子もどこかへ消えてしまった。

小幸は豪邸の表札を見てみた。  
そこには「兎島」と書かれていた。

「遅くなっちゃったね。帰ろうか...。」

小幸が言うと、清香もそれに賛成した。

帰りの電車の中で、清香に簡単に説明した。

「じゃあ、あの園部恵子って人が事件と何か関係あるの？」

「新之助さんはそうじゃないかって思ってるみたいよ。」

「ふーん…。あの人が次々と人を殺しているのかな？」

「それは…わからないけど。」

本当に小幸にはわからなかった。

ただ、今日見た光景を新之助に伝えなければ、と思っていた。

自宅に着いて、小幸はすぐに新之助に電話をかけた。

『...そうか、園部恵子が東京にね。』

「そうなんです。それで、'児島'って書かれた豪邸をじーっと見てて。その家の人が帰ってきたら、園部恵子さんもいなくなっちゃいました。」

『児島？住所はわかる？』

「うーん、だいたいならわかります。」

そう言って、小幸はカフェから後を追った道を新之助に説明した。

『それを見たのは何時頃？』

新之助が更に聞く。

「多分、夕方の6時頃です。」

『そうか、教えてくれてありがとう。ただ、今後はこんな真似をしたらダメだよ。危険だからね。』

「...はい。」

その時、兄の優がリビングから呼ぶ声がした。

「おーい、小幸！飯だぞ！」

『ぷぷぷ...お兄さんが呼んでるぞ。ご飯だそうだよ。』

新之助がおかしそうに言った。

「あ、やだ。すみません、じゃあまた。」

小幸がひとりで顔を赤くしてそう言うと、

『じゃあね、大好きだよ。』

そう言って、電話は一方的に切れた。

サラリと言われたセリフにぼーっとしていると、また優に呼ばれてしまった。

「はいはい、今行くって！」

小幸はそう叫んでリビングに降りた。

優が家政婦のサエ子を用意してくれた夕食を並べている。

「電話してたのか？」

「うん...。」

「男か？」

「...。」

「そうか。...学校への送り迎えはどうかと思うぞ？」

「！」

「おふくろが帰ってきていた日の朝に迎えに来てただろう？」

(やっぱり見られてたんだ...。)

小幸は新之助の勘の鋭さに妙に感心していた。

「小幸、聞いているのか？」

「聞いているよ。」

「あの探偵と付き合ってるのか？」

「なんか質問攻め。」

「小幸...。」

「私だってもう高2だよ。彼氏くらい出来たっておかしくないでしょう？」

「...まあ、いい。あまり心配掛けるなよ。」

「わかってる。」

その後の夕食は、二人とも黙々と食べた。

翌日、学校に幼馴染の和泉健太が登校していた。

「ケンちゃん、今日は朝から学校に来られたんだ。」

1年生の女の子達が遠くからキャーキャー言って、健太を見ている。

「おはよう。今日は完全にオフだから。」

モデルの仕事をしている健太が、1日中学校にいるのは、めずらしい。

健太が通るたびに黄色い声上がる。

「...ますます人気者だね。」

小幸が小声で言うと、

「おちょくるな。」

そう言って、健太が小幸の頭を小突いた。  
その光景を、他の女子生徒が羨望の眼差しで見ている。

「ケンちゃんと一緒にいると皆に嫌われそうだから、私先に行くわ。」

クラスの違う小幸はそう言って、その場を立ち去ろうとした。

「おい、小幸、待てよ。」

健太に呼び止められる。

「ん？なに？」

「あー、今日、久しぶりにうちに来ないか？」

「え？ケンちゃんちに？」

「うん。」

「いいけど…。なんで？」

「おふくろも久しぶりに小幸に会いたって。」

「おばちゃんが？懐かしいなあ。ご近所なのにあまり会わないからね。わかった。じゃあ、1度家に帰ってから行くね。」

「おう。」

小幸が教室に入ると、清香はもう先に来ていた。

「おはよう、清香。昨日はごめんね。」

「ううん、新之助さんに昨日見た事は言ったの？」

「うん、でももう、危ない事はしちゃダメだって。」

「愛されてるねえ。」

「...清香あ。」

「あはは、小幸からかうと面白い〜。」

「もう。」

「そういえば、今日は和泉君来てたね。」

清香が話題を変えた。

「うん、今日はモデルの仕事ないんだって。だから、家に来たって。」

「和泉君の家に？」

「うん。」

「ひとりで？」

「うん。」

「えー？」

「な...なに？」

「それはまずいんじゃないの？」

「どうして？」

「だって、いくら幼馴染とは言え、彼氏のいる分際で他の男の家に行く？」

「他の男って...。だって、今日はケンちゃんのおばちゃんもいるんだよ。」

「ふーん...。新之助さんにこの事言うの？」

「それは...。」

「ほら、後ろめたいんだ。」

「そんな事ないよ！」

担任が教室に入ってきてしまったので、まだ何か言いたそうな清香は仕方なく席に着いた。

(これって...いけない事なのかな...。)

なんとなくモヤモヤしたまま、その日の授業を終え、小幸は、自宅へと帰った。

(だって、幼馴染だし、おばちゃんもいるし。)

そう、自分に言い聞かせて、制服から私服に着替え、健太の家へと向かった。

学校とは逆方向にあるので、健太の家を見るのも久しぶりだった。

チャイムを鳴らす。

玄関がガチャリと開き、健太が顔を出した。

「おう、早かったな。俺もさっき帰ったところ。まあ上がれよ。」

制服を着たままの健太が、小幸を自宅へ招き入れた。

「おじゃましまーす。」

健太の家に来たのは何年振りだろう。

「あ、この傷！」

小幸が健太の家の廊下にある柱の傷を指差した。

「ああ、これ、お前がつけたやつだな。」

「そう...確か、ケンちゃんと喧嘩して、ここにあった電話を投げたんだ...。」

「ひどい女だ。」

「昔の話!...ところでおばちゃんは？」

「今、ちょっと買い物に出てるよ。」

「...そうなんだ。」

リビングに通されると思って、廊下を左に曲がった小幸に、健太が

「おい、どこ行くんだよ。」

「え？」

「俺の部屋は2階だ。忘れたのか？」

「え？部屋？」

「2階だ。」

もう一度健太が言う。

「でも...。」

「でも、なんだよ。あ、お前まさか何か警戒してるのか？」

「ち、違うけど！」

「おい、ふざけんな、このちんちくりんが。」

「ちんちくりん！？」

「お前なんか襲わねーよ。」

「...。」

小幸は、ふてくされて、健太について行った。

健太の部屋は意外と質素だった。

「な...なんか余計な物が何も無いね。」

「ああ、俺今、東京にもマンション借りてるんだ。」

「そうなの？」

「事務所が借りてる部屋なんだけど、仕事が立て込んだら、そっちに寝泊まりしてる。」

その事を、小幸は知らなかった。

「そうだったんだ。だから、ここにはあまり物がないのね。」

「そう。」

「行ったり来たりで大変なんじゃない？東京の学校に転校した方が楽なんじゃないの？」

「...それは...。別にいいだろ。」

「そっか、編入試験受からないもんね。」

そう言って、小幸が笑うと、

「お前、さっきの仕返しかな？」

と言って、健太が小幸の脇腹をくすぐり出す。

昔はよくこうして二人でふざけて、調子に乗って、拳句の果てに、本当の喧嘩になったものだった。

「ちょ、ちょっと、やめ、あはは、くすぐりたい、ひー。」

「お前の弱点はすべてわかっている。」

「ぎゃー、やめてー！」

小幸は床に転げ回った頃、

「ただいまー！あら、お客さん？」

という、健太の母親の声がした。

小幸は健太から逃れるように、急いで、階段を降り、玄関へ向かった。

「おばちゃん！」

「まあ、小幸ちゃんだったの！？久しぶりねえ。まあ、綺麗になって！」

「おばちゃんは、全然変わらない。若いままだね。」

「あら、嬉しい。今お茶淹れるわね。待ってて。」

そう言って、健太の母はキッチンへ入って行った。

小幸が、健太の部屋へ戻ると、ちょうど健太が着替えをしている所だった。

「あ、ごめっ」

慌ててドアを閉めると、中から、

「かまわねーよ。」

という健太の声が聞こえた。

「でも....。」

健太の部屋のドアが開く。

「もう済んだよ。入れよ。」

「お、おばちゃん、全然変わらないね。」

小幸が話題を変えようと、そう言うと、

「そうか？もう立派なババアだ。」

と健太が笑った。

「立派なババアで悪かったわね！」

振り向くと、健太の母がお茶を持って、そこに立っていた。

「ほんと、口が減らないんだから。はい小幸ちゃん、どうぞ。」

「おばちゃん、ありがとう。わー、ロールケーキ！」

「昨日作ったのよ。良かったわあ。健太があまり食べてくれないから、全部自分で食べようかと思ってたのよ。」

「俺は甘いもんは嫌いなんだ。」

「昔はよく二人で食べてくれたのにねえ。」

「うん、おばちゃんのロールケーキ最高だもん！」

「ほら、小幸ちゃんはいいい子だわあ。」

「置いたらさっさと行けよ。」

「あらやだ、私だって小幸ちゃんとお話したいのに。じゃあ、小幸ちゃん、後でリビングに来てね。」

「ありがとう。」

そう言うと、健太の母は1階へ降りて行った。

「ったく。」

「ケンちゃん、おばちゃんにもっと優しくしなよ〜。」

「いいんだよ。これでバランスがとれてるんだ。」

「へんなの。」

健太の父は、健太が幼い頃に亡くなっている。

今は、健太も東京にいる事も多いはずだから、健太の母は寂しいのではないかと小幸は思っていた。

健太の部屋を見渡すと、数冊の雑誌が床に置いてある。

「これ、ケンちゃん載ってるの？」

健太がモデルをしているのは男性ファッション誌が多いので、小幸はあまり見た事がなかった。

「そうだよ。」

「見せて。」

パラパラとページをめくると、制服の健太とはまるで違う、別人のようなモデルの健太が目飛び込んだ。

「わあ…。これケンちゃん？だよな？」

「うん。」

何ページにもわたって、健太が載っていた。

健太がこのファッション誌のメインモデルなのだと、小幸にもわかった。

「わあ…。」

「お前、『わあ…。』しか、ないのかよ。」

そう言って、健太が笑う。

「だって、すごいんだもん！ケンちゃん、すごいね！カッコいい！」

健太はまんざらでもない顔をしている。

「...この今のジャージ姿を読者に見せてやりたいよ。」

「これはこれでいいだろ。」

「自信満々ね。」

「今度、ショーにも出るんだ。」

「しょー？」

「アホみたいな顔すんな。ファッションショーだよ。」

「え！？そうなの？」

「テレビも入るらしいぞ。」

「すごいじゃない！ケンちゃん、すごい！」

「出番は少ないけどな、でも俺はずっとショーに出たかったから、1歩前進した、って自分でも思ってる。」

着々と夢に向かっていく健太が眩しく見えた。

「ケンちゃんどんどん遠い人になっちゃいそう。」

「そんな事ねーよ。俺は俺だ。」

そう言って、健太が真っ直ぐに小幸を見た。  
吸い込まれそうな、透明な瞳をしている。

小幸は慌てて目を逸らした。

「で、でも、着々と夢に向かってるね。」

小幸がそう言うと、

「そうだな、いつかは海外のショーにも出るのが夢なんだ。」

そう言うと、なぜか沈黙してしまった。

小幸の雑誌をめくる音だけが、部屋に響く。

最後のページにならないように、ゆっくりとゆっくりと、小幸はページをめくっていった。

雑誌を読み終えてしまったら、何を話せばいいのかわからなかったのである。

「なあ...。」

先に口を開いたのは健太だった。

「なに？」

雑誌に目を落としたまま小幸は答えた。

「前にバス停で会ったやつ、お前の...男なのか？」

小幸は、健太と歩いている時に、APPLE HOUSEの前のバス停で、新之助に会った事を思い出した。

「あ...。」

「そうなんだな？」

「あ、うん…。でもあの時はただの知り合いだったっていうか…。」

「じゃあ、最近付き合いだした？」

「まあ、そう...かな。」

「なんだよ、ハッキリしねーな。」

小幸はこれまでに、彼氏と呼べる人ができた事がなかった。  
中学の時、好きな男の子がいたが、一緒に帰ったり、寄り道をするだけで、高校が分かれてしま  
ったら、それっきりになってしまっていた。

「なんていうか、彼氏っていうのがどういうものなのか...。」

「なんだそれ。お前、あいつの事好きなんだろう？」

「う...ん。まあ、いいじゃない、この話は。」

しかし、健太はさらに突っ込んでくる。

「手とか繋いでるんだろ？もしかして、もうキスしちゃった？」

小幸の顔が一気に真っ赤になった。

「正直だな。」

健太が茶化したように言う。

小幸はなんだかムツとして、

「ケンちゃんには関係ないでしょ！なんなのよ！」

と大きな声で言ってしまっていた。

「ごめん…。悪かった。ごめん。」

健太が素直に謝ってきたので、小幸も思わずムっとしてしまったのが恥ずかしくなって

「私も大きな声で…ごめんね。」

と言った。

「おふくろが、リビングで待ってるぞ、きっと。」

健太がそう言うので、

「ああ、うん、じゃあ下に降りてみる。」

そう言って、小幸は階段を駆け降りた。

リビングに行くと、健太の母が満面の笑みで迎えてくれた。

昔の写真を見たり、昔話をしたりして、楽しく過ごした。  
が、結局健太がリビングに降りてくることはなかった。

日も暮れ、小幸がそろそろ帰ります、と言うと、

「健太ー！小幸ちゃん帰るってよ？」

と健太の母が2階に向かって叫んだ。

「おう！またな！」

健太が部屋から叫び返すのが聞こえた。

「なによ、あの子降りても来ないで...ごめんね。また、いつでも来てね。健太がいなくても来てね。」

「うん、おばちゃん、ご馳走様でした。また来るからね。」

そう言って、小幸は自宅へと帰った。

健太はそんな小幸の背中を部屋の窓から見ていた。

新之助と花井刑事は東京の児島邸前にいた。

小幸が園部恵子を見たという、高級住宅街だ。

「児島誠一郎か...。」

花井がつぶやいた。

児島誠一郎とは、旧建設省時代の大臣で、現在は隠居生活を送っているが、今でも政界への発言力が強いという事で知られている。

花井の車の中で、二人は児島邸を見張っていた。

「花井、園部恵子の素性はわかったか？」

「それが、調べても出てこないんだよ。現在の住まいに住民票がない。水族館の同僚に以前東京に住んでいた、と話した事があるって言うから、そのあたりも調べてるんだけどな、園部恵子という名前が一向に出てこない。もしかしたら...。」

「偽名か？」

「かもしれないな。もう少し調べてみるよ。」

そんな話をしているうちに、児島誠一郎が、高級車で自宅を出た。

ここ数日、二人はこの児島邸を監視している。

朝は8時半に自宅を出て、夕方の6時に帰宅する、というのが児島の平日のパターンらしい。

「行先は、毎日同じというわけじゃないんだな。」

「そうだな、しかし、どこへ行っても、必ず夕方6時には帰宅する。」

二人は、近所の聞き込みをする事にした。

隣家へ行き、インターホンを鳴らす。  
50代くらいの女性が出てきた。

「すみません、お隣の児島さんについて少しお伺いしたいのですが。」

「児島誠一郎さん？」

「ええ、元大臣の。」

「立派な方ですよ。」

「それはわかっています。児島さんは毎日同じ時間に家を出て、決まって夜の6時に帰宅する。ご存知ですか？」

「ええ、知っていますよ。6時にヘルパーさんが帰るんだと聞いていますわ。」

「ヘルパーさん？」

「ほら、奥様がいらっしゃるから。」

「どういう事ですか？」

「奥様は病気を患われて、介護が必要なんです。ですから、昼間はヘルパーの資格を持つ家政婦さんをお願いしていて、夜の6時からには児島さんが奥様を看ていらっしゃるんですよ。」

「なるほど、そういう事でしたか。」

「私の主人はきっと、そんな事してくれないわ。」

女性は皮肉な目つきになって、そう言った。

車に戻った花井は、

「以外だな。」

「児島誠一郎の事か？」

「そうだ。献身的に奥さんを介護しているという。そういうイメージはなかったな。」

「まあ、そうだな。」

「それから、調べてひとつわかった事がある。」

「なんだ？」

「殺された吉岡久美子の都議選の時に、当時大臣だった児島が応援演説に駆けつけている。それで、不利だと言われていた吉岡久美子が逆転して勝利した、という事らしい。」

「吉岡久美子と児島誠一郎には接点があるってわけか。」

「そうだ。二人は同じ党だから、不思議ではないんだが、吉岡久美子は当時新人で無名に近かった。それを、当時の児島大臣が援護して当選したんだ。」

「なるほど、そういう事か。」

新之助がそう言うと、花井が

「そういう事？」

「男女の関係って事だろう？」

「そういう事か。」

花井も納得したように笑った。

「よし、その線から調べよう。」

吉岡久美子と児島誠一郎の関係は意外とあっさり出てきた。

それはその当時、週刊誌にも書かれたほどだった。

「やっぱりな。」

「児島は随分と女好きらしいな。吉岡久美子の他にも噂は山とあるみたいだ。」

「児島の後ろ盾で、吉岡久美子は都議会でも随分と発言力があつたんだな、ほら、この博物館や、ゴミ処理場なんか、吉岡久美子の提案が次々と通っている。」

「住民の反対が出やすいような問題を簡単に通してるんだな。」

当時の資料を見てみると、吉岡久美子が都議の時代、都営施設が次々と完成している事がわかった。

恐らく、後ろにいる児島の力が大きかったのだろう。

小さな記事に、新之助は気になるものを見つけた。

「ん？」

「何かあったか？」

「ほらこれ、『ひまわりの公園、都営施設建設により、秋にも撤去。』って。」

「ひまわりだと？」

そう言うと、花井も記事を覗きこんだ。

記事によると、ひまわりが咲く公園を撤去し、都営施設を建設する案が出ているというものだった。

当然近隣住民から反対運動が出ており、この日も都と住民の間でひと悶着あった、と書いてある。

この件にも、吉岡久美子が絡んでいた。

「ひまわりがここで出てきたな。」

新之助と花井は、そのひまわりの公園があった場所へ行ってみる事にした。

現在は、「都立資料館」という建物が建っている。

中へ入ってみると、地元の歴史や、出身者で有名になった人物などの資料が並べられている。

「今日は休みじゃないんだろう？」

「入れたって事は、やってるんだろう。」

しかし、その日訪れている人は誰もいなかった。

「これを作るために、公園を潰したのか。」

花井は納得いかない、という顔をしていた。

二人は近所の人のお話を聞いてみる事にした。

古びたフラワー商店街という所で、ずっと魚屋を営んでいるという夫婦が話をしてくれた。

「18年前まであそこは、綺麗なひまわりの咲く公園だったんですよ。子供たちも喜んで遊んでいたのに。うちの子も小さい時はよく遊んでいたんですよ。」

妻が言う。

「それが、突然都の資料館を作る、って言うんだ。俺たちは猛抗議した。資料館なんか作ってどうするんだ、って。あんなの税金の無駄遣いだよ。」

今度は、主人が怒ったように言った。

「あんなのお役人の天下り先を増やしただけです。その時の建設大臣だって絡んでたって話じゃないか。」

「児島誠一郎ですか？」

「そうそう、確かそうだよ。表面上は都で進めてるって事になってたけど、役人の天下り先を作るために、元大臣が裏で操ってたんだ。」

「しかし、住民の皆さんの反対もむなしく、施設は建ってしまった。」

花井が言う。

「そうですよ、それにあんな事故が起こってしまったしね...。」

「事故とは？」

「公園が取り壊される、っていう前日にすごい台風が来たんですよ。朝は少し雨が降っている程度だったんですけどね、夜になるにつれて雨も風も強くなって。」

「それで？」

「翌日、台風一過でとてもよく晴れたんです。取り壊す予定の当日だったけど、少しでも私たちは抵抗しようと思って、あの公園に集まりました。」

その先は主人が話した。

「でもね、俺達が着いた時には救急車が来てたんだ。」

「救急車？」

「台風の影響で弱った木が倒れたのさ。工事の前の朝早くから、近所の奥さんと娘さんがあの公園で遊んでいたらしいんだが、倒れた木の下敷きになったらしい。」

「それで、その二人はどうなったんですか？」

夫妻が顔を見合わせる。

「...かわいそうに、娘さんは死んでしまったよ。奥さんも大けがを負ったはずだ。」

「そうだったんですか...。」

「それでもう、俺たちは抗議どころじゃなくなって、公園は取り壊されて更地になってしまった。そのうちに、あの資料館ができてしまったよ。」

「その、事故に合われたご家族は今もこの土地に？」

「娘さんが亡くなってから間もなく、奥さんは出て行ってしまったって話だよ。それに、主人もやってた店をたたんでどこかへ行ってしまったよ。無くなった子は一人娘だったんだ。」

「どこへ行ったかわかりませんか？」

「さあねえ、俺も気になって聞いたりしたんだけど、誰も知らないみたいだよ。」

「ありがとうございました。」

夫妻に礼を言って、車に戻った。

「シン、どう思う？」

「...児島元大臣に、都議の吉岡久美子、ひまわりの公園、事故で亡くなった娘...。」

新之助は独り言のように何度も繰り返した。

「児島元大臣に1度会ってみよう。」

花井がそう言って、車を児島邸に走らせた。

時間まで車内で待機し、6時に帰ってくる児島を待った。

夕方6時、時間通り、児島の車が戻ってくる。

二人は、少し時間をおいて、インターホンを鳴らした。

若い女性の声が、

『はい、どちらさまでしょうか。』

と言う。

「警視庁の花井と申します。児島誠一郎さんに御面会をお願いしたいのですが。」

と丁寧に答えた。

『しばらくお待ち下さいませ。』

そう言って、5分程待たされ、門が開いた。

すらりとした美人が、出迎える。

「お会いになるそうです。どうぞ。」

応接室に通され、更に20分程待たされた。

和服に着替えた児島が、

「どうも、お待たせしました。」

と言って、入ってきた。

「突然申し訳ありません。」

花井は、まずそう詫びて、

「今日は、東京都の資料館の事でお伺いしたいのです。」

といきなり聞いた。

「資料館？」

児島はわからない、という顔をしている。

「フラワー商店街という古い商店街の横に建っているものです。資料館が建つ以前は、ひまわりの咲く公園だったのですが。」

ひまわりという言葉聞いて、児島の顔が少し変わったように見えた。

「それが、どうかしたのかね？」

「あの資料館は、児島さんが建てられたのですか？」

「馬鹿な事を言うな。個人の力で都営の施設は建てられんよ。」

「そうなんですか？」

なおも、花井は食い下がる。

「吉岡久美子という元都議をご存じですね？」

また、児島の顔色が変わった。  
しかし、すぐに平静を装って、

「もちろん知っている。同じ党にいたこともある。彼女は数年で離党したがね。」

と言った。

「亡くなったのは、ご存じですか？」

「ニュースで見たよ。驚いた。」

「それだけですか？」

「どういう事だね。」

「吉岡久美子さんと、児島先生は、以前同じ黨員同士という以上の関係がおありだったのではないのですか？吉岡久美子さんの担当してた案件にも、ご助言をされていたとか。」

花井がずばりと聞いた。

児島は少し考えて、

「君は、昔のゴシップ記事を信用するのかね？」

と笑った。

「違うんですか？」

「吉岡君とは、当然何もない。亡くなった事には驚いたし、お悔やみ申し上げます。彼女も無念であっただろう。君たちもこんな所に来ていないで、早く犯人を捕まえるべきだろう。」

今度は兎島にそう言われてしまった。

「犯人は捕まえますよ。現在捜査中です。ところで...。」

「まだ何かあるのかね。」

「あの、出迎えに出て下さった若い女性はお嬢様ですか？」

「あれは、私の秘書だよ。」

「秘書の方ですか。ずいぶんとお綺麗でしたので、お譲様かと思いました。」

「私には子供はおらんよ。家内が病弱なんだ。」

「献身的に介護をされていると伺いました。」

「夫婦としては当然だろう。」

「...ご立派です。今日はお忙しいところありがとうございました。これで失礼します。」

そう言って、花井は立ち上がり、新之助もそれに続いた。

美人秘書がまた、玄関まで送ってくれた。

「あなたは、児島元大臣の秘書だそうですね。」

「ええ、そうです。」

「いつも、このお宅にいらっしゃるんですか？」

「私は、昼間事務所の方におりますので、夕方からこちらに来ていますわ。」

「6時頃から？」

「ええ、だいたいそのくらいですわね。ヘルパーさんもこの時間に帰るので。」

「なるほど。」

「何か？」

「いえ。なんでもありません。では、こちらにお泊りになることもある？」

「...それは、時と場合によって、先生のご指示があればそうする事もあります。ここに、私の事務室も用意して下さっていますので。そこで寝泊まりできるようになっていますわ。他の秘書が泊まることもあります。」

美人秘書が言葉を選んでいるのがわかった。

花井も新之助も内心おかしかった。

二人は兎島邸を出て車に戻った。

「病弱の奥さんを部屋に置いて、若い秘書と暮らしているのか。」

「まあ、そんな所なんだろうな。」

「だから、毎日定刻に帰宅する。」

「年をとっても、お盛んってことか。」

「奥さんが気の毒だな...。」

「そうだな…。どんな気持ちで毎日を過ごしているんだろうな。…花井、俺は千葉に行くよ。あ  
ちで調べたい事がある。」

「わかった、じゃあお前の家まで送るよ。」

九十九里に着いた新之助は、まず小幸に連絡をした。

「もしもし、小幸ちゃん？遅い時間に電話してゴメン。」

『いえ、大丈夫です。今日は優くんも遅いみたいだし。』

「お兄さんの事'優くん'って呼んでるんだな。」

そう言って、新之助が笑うと、小幸は恥ずかしそうに、

『あ、つい癖で...。』

と答えた。

「じゃあ、少し出てこられる？」

新之助がそう言うと、小幸はOKし、近所の公園まで出てきた。

そこで、新之助はこれまでわかった事を小幸に話して聞かせた。

「もしかして...。そのひまわりの公園で怪我をしたお母さんって...。」

「うん、俺もそうなんじゃないかって思ってるよ。」

「園部恵子さん...。」

恵子の腕には大きな古傷がある。

これは、その事故の時にできたものなのではないだろうか。

「じゃあ、やっぱり園部恵子さんが3人を殺したんですか？」

「それは、どうだろう…。吉岡久美子は女性だけど、あとの二人は男性だよ。女性一人で男二人を殺せるとは考えづらいな。」

「そうですよね…。園部恵子さんは、すごく華奢な人だったし…。じゃあ、共犯の男性がいるってことですよね。」

「そうなるだろうなあ。」

「目星がついているんですか？」

「なんとなくね。でもまだ、確信が持てないんだ。」

「そうなんですか…。」

「うん、もう少しこっちで調べてみるつもりなんだ。こっちにいれば、小幸ちゃんにも会えるしね。」

「そんな…。」

「ほんと、ほんと。」

「あ、そういえば。」

「ん？」

「新之助さんの言う通り、私が新之助さんの車に乗るところを母と兄が見ていたみたいなんです。」

「やっぱりな。」

そう言って、新之助は笑った。

「俺の勘は、結構鋭いんだよ。自分で言うのもなんだけど。」

「そんな感じがします。なんでもバレそう。」

「バレてまずい事があるのか？」

「あ…。いえ、そんな事はないんですけど…。」

新之助が、じっと小幸の瞳を見つめている。

「…何を隠してる？」

「か、隠してなんかないんです。ただ、清香が…。」

そこまで言って、小幸はマズイと思った。  
が、遅かった。

「清香ちゃんがどうした？」

「…。」

「小幸ちゃん、何でも話していいんだよ。」

新之助は、今度は優しく言った。

「…あの、ごめんなさい。私は…。そんなつもりはないんです。でも、清香はダメって…。」

「うーん？最初から話してくれる？」

「ごめんなさい...。」

「いいよ。」

「新之助さんは、私が他の男の人の家に遊びに行くのって嫌ですか？あ、男の人って言っても、幼馴染だし、そのおばちゃんも昔から知っていて、家族ぐるみの付き合いって言うか、一緒に大きくなった、って言うか、とにかく、恋愛感情はないし、今も友人で...。」

小幸はそこまで一気に話した。

「つまり、小幸ちゃんは、あの和泉君の家に一人で遊びに行った、そういう事なんだね？」

「！...今のでなんでわかるんですか。」

「探偵だから。」

新之助は続ける。

「そうだな、別に男の友人が居たっておかしくないよ。幼馴染ならそれこそ、ご家族ともお付き合いがあるんだろうし、第一、小幸ちゃんに恋愛感情がないなら、構わない。もちろん、恋愛感情が他の男にあったら困る。ただ、」

「ただ？」

「彼の方はどうなんだ？」

「え？」

「彼は、小幸ちゃんの事をどう思っているのかな？」

「それは...。多分私と同じだと...。」

「そうかな。」

「だって私の事、'ちんちくりん'って言うんですよ。」

「ちんちくりん？そりゃあいいや。」

そう言って、新之助がおかしそうに笑う。

「笑い事じゃないです。」

「ごめんごめん。」

「それに、ケンちゃんはモテるんです。モデルだし、学校でもキャーキャー言われてるし...。」

「学校でキャーキャー言われているような、モデルのイケメンが、それには見向きもせずに彼女もいなくて、幼馴染の小幸ちゃんを家に招き入れる。そういう事でしょう？」

「それは...。」

小幸は困ってしまった。

「あはは。いいよ。ごめん。困らせるつもりはないんだ。俺は...。」

そう言って、新之助は小幸の方へ向き直ると、

「小幸ちゃんが俺だけを見ていてくれればいいんだ。」

そう言って、優しく抱きしめた。

それから、新之助は数日房総に滞在して色々と調べているようだったが、小幸は何を調べているのか聞かなかった。

それよりも小幸は、着々と近づいてきている試験に焦っていた。

小幸と清香は、APPLE HOUSEでそれぞれ教科書やノートを広げて、黙々と勉強していた。

「はいこれ、僕から二人に。」

店長の吉田が、ハンバーガーを2つ差し出した。

「え！？店長、いいんですか？やったー。」

小幸と清香は素直に受け取って、食べた。

「おいしい」またやる気が湧いてきました。」

「それは良かった。頑張ってるね。」

小幸は、ようやく将来自分がやりたい事が見えてきていた。

しかし、まだ誰にも話した事が無かった。

「清香は、看護師になるって決めたの？」

「うん、頑張ってる医学部の看護学科を受験しようと思ってる。」

「へー、医学部の？」

「小幸は？」

「私は…。うん、まだ。もう少し考えてみようと思って。」

「そろそろ決めないと、時間無いよ？」

「うん、分かってるんだけどね。」

小幸は、今は目の前の試験に集中しよう、と考えていた。

その後、二人とも一言も話さずに勉強した。

「そろそろ帰ろうかな。小幸は？」

日が暮れた頃、そう声をかけたのは、清香だった。

「私は、もう少しだけやって帰るね。また明日学校で。」

「わかった、じゃあね。」

そう言って、清香は帰って行った。

「ちょっと...トイレ...。」

小幸は、店の奥のトイレへと向かった。

いつもは閉じている「staff only」と書かれたドアが、今日は少しだけ開いていた。

「ここは店長が休憩したりする部屋なのかな。」

小幸は独り言を言って、何の気なしに部屋を覗いてみた。

そして壁に掛けられた写真を見て、ハッとした。

「これって...。」

背後に気配を感じて、振り返ろうとした瞬間、小幸の意識は遠くなっていた。

その頃、新之助は水族館にいた。

閉館まで待って、新之助は通用口から出てきた園部恵子に近寄った。

「こんばんは。園部さん。」

恵子が新之助を見る。

「...どなたですか。」

「僕は小笠原新之助と言います。先日、園部さんのショーを拝見しました。イルカのショー、見事でした。」

「...それはどうも。ご用件は？」

「僕の彼女が、...ああ、あの時はまだ彼女ではありませんでしたけど。そんな事はどうでもいいですよ。その彼女ですが、ショーの時に足を滑らせて園部さんに助けて頂きました。咄嗟に支えて頂いたんです。」

恵子は、思い出した、という顔になって、

「ああ、あの女の子の連れの方ですか。」

と言った。

「はい。助かりました。危うくプールに落ちる所で下から。」

「そうでしたね、彼女は大丈夫でしたか？」

「はい。...ところで。園部さん...いや、」

新之助は一呼吸置いて、

「深田真知子さん。」

新之助が発した名前に、恵子は顔色を変えた。

「あなた、何者？」

「僕はただの探偵です。」

「探偵？」

恵子はいぶかしげに新之助を見ている。

新之助は構わずに、

「その腕の傷はどうされたんですか？」

と聞いた。

恵子は、

「昔作ってしまったものです。あなたには関係ないでしょう？」

と返す。

しかし、表情はこわばっている。

「そうですね、その傷自体には関係ないのかもしれませんが。」

新之助はそんな言い方をした。

「私、疲れているんです。帰りますよ。」

恵子と言う。

「まあ、待って下さい。僕には話があるんです。」

恵子は新之助を睨むようにして見ている。

「あなたは...東京で、主人と子供と暮らしていたが、訳あってこの土地にやってきた。そうですね？」

恵子の表情がだんだん曇って行くのがわかった。

「あなたは、当時5歳の娘さんがいた。」

「あなたには、関係ない。」

恵子がやっとの思いで口を開いているのがわかる。

「ひまわり。」

この一言で、恵子はまた、新之助を睨みつけた。

「ひまわりの公園で、娘さんとよく一緒に遊んでいたのではないですか？」

「あなたの...勘違いでしょう。私には夫も子供もいません。」

そう言いながらも、恵子の唇は震えている。

「深田さん...。」

「私は園部恵子です！」

その時、新之助の携帯が鳴った。

「ちょっと失礼。」

そう言って、新之助は携帯に出た。  
相手は花井だった。

「もしもし？今ちょっと忙しいんだが。」

新之助がそう言うと、

『それどころじゃない！』

と花井が叫んだ。

「どうした？」

『今、清香ちゃんから連絡を貰ったんだが...。』

「...お前、いつの間に連絡先を交換したんだ。」

『シン、冗談を言ってる場合じゃないんだ。小幸ちゃんが...。』

新之助は表情を変えた。

「小幸ちゃんがどうかしたのか!？」

『いなくなった...。』

「どういう事だ!？」

『わからないんだ。日が暮れる頃までは、清香ちゃんと一緒だったらしい。帰りが遅いとお兄さんが心配して、清香ちゃんに連絡をしたらしいんだが、携帯には出ないし、別れたハンバーガーショップにもいないらしい。』

「今、なんて言った!？」

『だから、携帯に出ないって...。』

「違う!どこで清香ちゃんと別れたって?」

『あそこだよ、APPLE HOUSEっていうハンバーガーショップ...。』

そこまで聞いて、新之助は電話を切ってしまった。

恵子を置き去りにして、新之助は車に乗り込み、APPLE HOUSEへと急いだ。

「小幸ちゃん...無事でいてくれ...。」

APPLE HOUSEに着いて、中へと駆け込んだが、誰もいなかった。

「小幸ちゃん！！」

呼んでみるもの、返事はない。

店の隅々まで見て回ったが、小幸も、店長の吉田も誰もいなかった。

新之助は、小幸の自宅へと向かった。

インターホンを鳴らすと、兄の優が血相を変えて出てきた。

「小幸か！？あ...おまえっ...。」

優が新之助に近づいてきた。

「小幸はどこだ！？お前が変な事件に巻き込んだんだろう！？」

「それは...。」

新之助は何も言えなかった。

後ろから、走ってくる足音が聞こえた。

和泉健太が血相を変えて、走ってくるのが見える。

健太は、

「清香から聞いた。小幸は！？」

と優に聞いた。

「まだ、帰らない…。APPLE HOUSEから消えたんだ。店のテーブルの上にこれがあった。」

優は、APPLE HOUSEから持ち帰った小幸の教科書やノートを健太に見せた。

新之助に気付いた健太は、

「あんた、心当たりはないのか！？」

と胸倉をつかんできた。

「…やめろ、健太。」

「俺、その辺見ってくる。」

健太はたまらず、道路に飛び出した。

「…間もなく警察もやってくると思います。僕も外を探しますから、お兄さんはここにいて下さい。」

新之助はそう言うのがやっとだった。

優の返事を聞かないまま、新之助は車に乗り込んだ。

当てもなく、車を走らせる。

(小幸ちゃん...どこなんだ。)

新之助の思いとは裏腹に、時間だけが過ぎていく。

警察も捜査を始めたが、一向に見つからない。

やがて、海岸線から太陽が顔を見せ始めた。

「無事でいてくれよ...。」

完全に日が昇った頃、花井がやってきた。

「シン...。」

「みつからないよ...。どこなんだ、小幸ちゃん...。」

新之助は疲れきった顔で答える。

「きっと見つかる、大丈夫だ。」

花井が励ますように言った。

明るくなったので、新之助は付近をもう一度探した。

花井の話によると、園部恵子も姿を消してしまったようである。

とうとう午後になってしまった。

「どこだ...。あと探していないところ...。もしかして、もっと遠くにいるのか...。いや、そんなはずはない。この九十九里にいるはずなんだ。」

新之助は自分に言い聞かせるようにして、言った。

必死に頭を働かせる。

「...そうか、あそこだ。」

小幸は、差し込む西日で目を覚ました。

「いたっ...。」

後ろ手に腕を縛られていて、動けない。

「ここどこ...？」

辺りを見渡す。

そこが古い和室だとわかった。

「どこなの...。」

その時、ドアが開いて、男が入ってきた。

「吉田さん!？」

APPLE HOUSEの店長の吉田がそこに立っていた。

「小幸ちゃん...。こんな事はしたくはなかった。申し訳ない。」

そう言うと、吉田は、小幸のロープをほどいた。

「どういう事なんですか!？なんで、私...。」

「小幸ちゃん、今はまだダメなんだ。もう少しなんだ。」

「何がですか？」

小幸は訳が分からないという顔で吉田を見た。

「吉田さん…。私、見たんです。APPLE HOUSEの店長室で。」

「…。」

「壁に、ひまわりの写真が貼ってありました。今回の事件と何か関係があるんですか？」

吉田は何も言わない。

その時、小幸は窓越しに新之助の車を見た。

（新之助さん！）

新之助は、車を降りると、急いで中に入った。

駆けあがってくる足音に、吉田はぎょっとしたような表情をしている。

やがて、新之助が小幸のいる部屋にやってきた。

「小幸ちゃん！！！！良かった、無事だったか。」

「新之助さん！…ここはどこなんですか？」

「つる屋だよ、ここは客室だった部屋だ。」

なるほど、だから和室なのだ、と小幸は納得した。

「小幸ちゃん、早くその人から離れて！こっちだ。」

「え？どうして？」

新之助は小幸の腕を引っ張って、自分の後方に小幸を押しやった。

「小幸ちゃん…。この人が今回の犯人なんだ。」

「吉田さんが？」

小幸は信じられない気持で、新之助の方を見た。

「残念だけど…。そういう事だよ。」

新之助は、吉田の方をまっすぐ見て答えた。  
吉田は黙っている。

新之助がゆっくりと話し始めた。

「吉田さん、あなたには奥さんと娘さんがいた。しかし、娘さんはずっと以前に亡くなっていますね？」

吉田は何も言わない。  
新之助は続ける。

「娘さんの亜矢ちゃんは、不幸な事故で亡くなったんだ。」

新之助がそう言うと、吉田の表情が少しこわばったように見えた。

「亜矢ちゃんが事故にあう前日は、ちょうど台風が来ていてすごい雨と風だったそうですね。近所の子供たちがよく遊んでいた公園の中のひまわり畑の周りには、銀杏の木が植えられていた。

台風の大雨と、風の影響で、翌日そのうちの1本が倒れたんだ。

亜矢ちゃんはその下敷きになって亡くなってしまい、かばおうとした奥さんも腕に大けがを負ってしまった。

不幸な事故だった。

誰もが、そう思っていた。

しかし18年経って、あなたは知ってしまったんだ。あれは台風による事故なんかじゃないって事を。」

「なんの話だ。」

吉田がようやく口を開いた。

「あの公園は、更地にして都立の施設が建つ計画があったんです。地元住民は反対した。公園は、都会の中で子供たちが自然と触れ合える貴重な場所だった。吉田さん、当然あなたも反対運動に参加していた。しかし、都の計画は止められなかった。いよいよ、更地にされてしまうという日の前日、亜矢ちゃんは最後にひまわり畑を見たいと言って奥さんとあの公園に行ったんじゃないですか？」

吉田は新之助を睨みつけるようにして聞いている。

「台風一過で、その日はよく晴れていた。季節が終わりかけていたひまわりは、少し元気のない姿をしていたが、亜矢ちゃんは、それでも満足して、ひまわりを眺めていた。しかし、台風のせいで弱っていた銀杏の木があなたの奥さんと亜矢ちゃんの方へ倒れてきた。」

小幸は新之助と吉田を交互に見た。

「当時、日雇い労働で建築のアルバイトをしていた木村悟史が、元都議の吉岡久美子に、前日の夜から工事を始めてしまうように言われたんだ。工事予定の当日では、反対している住民が押し寄せてきて、工事どころではなくなる事が予想された。吉岡久美子は、他の場所での公園取り壊しでもやはり住民と揉めていた。ひまわりの公園では先手を打とうと考えたんだ。吉岡久美子の後ろについていた児島元建設大臣からプレッシャーを掛けられていたのかもしれない。

工事が始まってしまえば、住民も手を出せないと思ったんだろう。

それに日雇いの木村なら、金で何でもすると考えたんだと思う。予想通り、木村は、もらった金で仲間を呼んで、夜中のうちに銀杏の木を切ってしまうことから始めようとした。ひまわりを運び出すのに邪魔になるからね。しかし、昼間から降っていた雨が夜中になって本格的になってきて、作業どころではなくなってしまった。木村たちは、仕方なく切り上げたが、仲間の一人が、すでに1本だけ銀杏の木を切りかけていたんだ。

木村はその事を知っていたが、まさか翌日に倒れてしまうとまでは、考えなかったんだろう。そして、不幸にも...亜矢ちゃんは犠牲になってしまった。僕は、その木を切りかけてしまった仲間というのが、3番目の被害者、ホームレスのタカオだったんじゃないかと思っています。」

「馬鹿な事を言うな。お前の想像にすぎない。」

「園部恵子さん。」

新之助がふいにその名前を言うと、吉田の顔がひきつった。

「園部さんは、あなたの元奥さんですね？」

「...。」

「水族館のイルカの調教師です。右腕に大きな古傷がある。」

「園部さん、いやこれは偽名だ。正しくは旧姓の深田真知子さん。あなたの元奥さんだ。」

そこまで言うと、吉田が口を開いた。

「あいつは...何もしらん。関係ない。」

「何もとは？事件のことですか？」

吉田はまた黙ってしまった。新之助はかまわず続ける。

「真知子さんとは亜矢ちゃんの事故後離婚したんですよね。大切な一人娘を失ったあなたたち夫婦は、その後関係がぎくしゃくしてしまった。たまたま、真知子さんが家を出たのだと思います。そして真知子さんは、あなたと結婚するまで仕事にしていたイルカの調教師をこの房総で始めた。偽名を使ってね。別人を演じることで、なるべく辛い過去を思い出さないようにしたのかもしれない。」

「...。」

「時が経って、あなたは真知子さんとやり直そうと考えた。しかし実家に連絡しても居場所が分からないという。ようやく房総でイルカの調教師をしているらしいことを突き止めたあなたは、真知子さんに会いに行った。違いますか？」

目を閉じて天を仰いだ吉田がようやく重い口を開いた。

「俺は...。亜矢を失って、真知子ともうまくいかなくなって、あいつが出て行った後は自暴自棄になって酒ばかり飲んで暮らしていた。その当時やっていたパン屋も閉めた。もうどうにでもなれと思ってたんだ。だけど、ある日、亜矢が使っていた部屋を見たら真知子が全部そのままにしてあったんだ。俺は事故の後、亜矢の部屋には入る事ができなくなっていた。亜矢が死んでから初めて入った部屋で、幼稚園で描いたらしい俺と真知子の絵をみつけた。あのひまわり畑に3人で行った絵だよ。裏には描いた日付と...」

そこまで言って、吉田は言葉に詰まった。

「吉田さん...。」

小幸が思わず声をかける。

「...俺は、真知子とやり直そう、もう一度、人生をきちんと歩こう、そう決めた。」

吉田がまた語り始めた。

「この房総で真知子と再会した。あいつは以前よりもだいぶ痩せたようだった。でも真知子も前を向いて人生を生きようとしていた。やり直すには、時が経ち過ぎていた。俺達は話し合っ、結局...それぞれの道を別々に歩むことにした。」

「しかし吉田さん、あなたはこの地にAPPLE HOUSEというファーストフード店をオープンさせた。別々の道を歩もうと決意したなら、東京に戻るのではないですか？」

一呼吸おいて、吉田が答える。

「そうだ。そうするつもりだったんだ。俺は真知子と話し合うためにここに来た。その時に宿泊していたのが、つる屋だ。女将さんに、ご主人が亡くなったんで、旅館を閉めようと考えているという話を聞いた。ロケーションも良いのに勿体ないですよ、と俺は言った。しかし女将さんの決心は固いようだったよ。一人で切り盛りするにも疲れてしまったのかもしれないなと思って、それ以上は何も聞かなかった。

...つる屋の裏手には絶好の釣りポイントがある。」

「ええ、知っています。僕も見に行きましたよ。」

「そこで、俺は釣りをしていたんだ。真知子とも話をして、何かが吹っ切れて、最後にここで釣りでもして帰ろうと思ってね。その時、あいつに会った。」

「あいつ？」

「木村悟史だよ。」

「この事件の最初の被害者で、建設会社の社長ですね？」

「そうだ。木村もその日宿泊していて、釣りで一緒になった俺に、つる屋の取り壊しと、新しくできるリゾートホテルの建設をうちの会社でやることになっている、と話した。リゾートホテルの経営をする会社の社長の誘いで、その日つる屋に宿泊した、とも話していた。

俺が明日の朝には東京に戻ると話をしたら、じゃあ今晚一緒に飲みに行かないか、と誘われたんだ。

別に予定もなかったし、旅館で夕食を取った後に木村と招待したっていう社長と待ち合わせをした。

俺はタダ酒が飲めると思って、どんどん注文した。木村もかなりの量を飲んでいたと思う。

あいつはお喋りだった。

話を聞いているうちに俺は気がついたんだ。木村が昔働いていたという場所が、俺の家の近くなんじゃなかったね。」

「なるほど。」

「でも俺はわざわざ身分を明かす事もないな、と思って適当に相槌をうって、話を聞いていたんだ。

あいつも俺も、酔っ払った。するとあいつが言ったんだ。」

「なんと？」

「俺が『木村さんは、そんなデカイホテルの建設を任されるような社長さんなんだから、この時代の成功者ですね。』って言ったんだ。おだてて、普段飲めないような、もっと高い酒を飲ませてもらうっていう気持ちもあった。するとあいつが、『私だって、ずっとこの位置にいる訳じゃないよ。日雇いのアルバイトの時代だってあった。公園の撤去をさせられたり、いろいろとね、危ない事もやってきたよ。』って言ったんだ。『公園の撤去？』って俺が聞き返したら、『そうだよ、あそこには立派なひまわりが何本も咲いていた。全部抜きとっちゃうなんてな、勿体ない話だ。』と言い出した。俺はピンときた。あのひまわりの公園の話だってね。あいつは、まさか俺がその公園を知ってるなんて思っていないから、思い出話を聞かせるように、喋ったよ。俺が『公園にひまわりが咲いていたんですか？』って聞いたら、『そうだ。なんだか、都の施設を建てるとかでね、工事予定の前に撤去してしまえって、当時の雇い主に言われたんだ。でもその日は台風がきてしまって、仕方なく何もせずに、引き揚げる事にした。でも仲間が既に木を切りかけて...。』そこまで言って、あいつは喋り過ぎたと思ったんだろうな、『...あれは事故だったんだ。』自分に言い聞かせるように、最後にそう言って黙ってしまったよ。俺は、自分の酔いが一気に冷めるのがわかった。」

「あなたは、自分で事故の事を調べ始めた。」

「そうだ。なんせ15年以上も昔の話だ。当時の関係者を探すだけでも大変だった。俺は東京に戻って、手当たり次第、しらみ潰しに当たった。当時施設を建てようと議会に提案したのが、元都議の吉岡久美子で、吉岡が木村たちを雇った事まではわかった。でもなかなかその先に進めなかった。でも娘のために、必死に歩いた。そして、考えたんだ。

当時、日雇いで生活していたやつらが、みんな木村のように成功するとは限らない。むしろその逆だろうって。

それで俺は、目線を変えて、調べてみる事にしたんだ。」

「あなたの考えは当たっていたのですね？」

「何日も歩いて、上野でやっとそれらしい情報をつかんだ。ホームレスの「タカオ」と呼ばれているやつが、『昔俺は人を殺してしまった事だってあるんだ。』って言ってた事があるってね。ホームレスの連中はタカオが口から出まかせを言ってると思って、相手にしていなかった。俺はタカオを探しだして、ちょっとうまい酒を飲ませたら、あいつはすぐに喋ったよ。『俺が切り込みを入れた木が翌日倒れちゃうなんてなあ…。運命なんてわかんねえもんだな。あの時は偉いさんが始末付けてくれたから俺も助かったんだな。』って。他人事のように、ただの思い出の一部を語るように娘の死を笑った。

罪を償う事もなく、のうのうと生きてやがる。その場で殺してやろうとさえ思った。でもタカオが話を続けたんだ。

『しかしあいつが社長になってるとはな。ちょっと昔の事をつついたら、俺を社員にしてやるって。ちょろいもんだ。』この'あいつ'っていうのが木村の事だとすぐにわかった。」

「それで、あなたは少し様子を見ることにしたんですね？」

「そうだ。すぐにこいつを殺しても、何の意味もない。もっとじっくりと調べて、俺の復讐を晴らそうって思った。俺は東京の店を引き払って、房総に新しく店を出した。リゾートホテルを建てる為に、木村が房総に週の半分以上滞在する事がわかったからね。近くで見張ってやろうって思ったのさ。」

「あなたは、木村の行動を監視して、時を待った。これは僕の想像ですが、あなたは、木村と偶然再会したと装い、再び木村に近づいた。釣り好きが高じて、この地に店を出す事に決めたとも言ったのかもしれない。良かったら、今度店に来て下さいと言って、木村をAPPLE HOUSEに呼んだ。そして…。あなたは実行した。」

「その通りだ。あいつの首を絞めて殺して、海に投げた。」

「つる屋の裏からボートを出したんですね。」

「そんな事まで調べてるのか。」

「あそこは、釣り人がいなければ、人目につかない。あなたは「工事中につき立入禁止」の看板をその日だけ出したんだ。これは、たまたま事件の日に釣りに来た男性が証言しています。あなたは、木村さんを運び出し、ボートに乗せ、ひまわりと共に海に投げた。釣り好きのあなたは、その日の潮の流れまで計算に入れていたのでしょうね。翌日の朝には、人通りの多いあの浜で発見されると。」

新之助は、この事を調べていたのだ、と小幸は思った。

吉田は静かに答える。

「そうだ。」

「そして、第二の事件の被害者、吉岡久美子も同じように...。」

「あいつは金さえ払えばどうにでもなると思っている腐ったやつだ。俺は金を受け取るふりをして、吉岡を安心させて、呼び出した。吉岡は、俺の前に大金を積んだ。『娘さんの事は、本当に残念でした。』と言ってね。心にもない事を...。と俺は内心笑ったね。」

「そして、同じように首を絞めて殺してしまったんですね？」

「その通りだ。」

「でも、第三の被害者、ホームレスのタカオは、なぜ刺殺したんですか？」

「それは...。」

小幸は、これまで黙々と語っていた吉田が、初めて狼狽の表情をしたのを見た。

「あいつが抵抗してきたからだ。万が一の時の為に、俺はナイフも持っていたんだ。」

「そうでしょうか？」

「そうだ。」

「...。吉田さん、もう嘘は辞めませんか？」

「嘘じゃない！俺がタカオを刺したんだ！」

「吉田さん、あなたはタカオが殺された日、この房総にはいなかった。」

「...。」

吉田は新之助を睨みつけている。

「タカオが殺されたのは、早朝4時～6時という検死結果が出ています。5時に犬の散歩に出ていた主婦は、その時間には死体はなかったと証言していますから、殺されたのは5時～6時の間と言ってもいいでしょう。しかし、吉田さん、あなたはその日のその時間、この九十九里にはいなかった。」

「...違う。俺が、木村の会社の社員のふりをしてタカオを呼び出したんだ。木村は死んでしまったが、あなたを採用する事は社長から聞いているって言ってね。ニュースを見ないタカオは、何も疑うことなくここまでやってきた。」

新之助はかまわずに続ける。

「あの日は、娘の亜矢ちゃんの命日だったんですよね。」

その言葉を聞いて、吉田が明らかに動揺した。

新之助は構わずに続ける。

「...亜矢ちゃんが亡くなってから、毎年、欠かすことなく、ひと気の少ない早朝にお花と線香を手向けに来る人がいる、とご住職が言っていました。その日も、たまたま庭に出ていたご住職があなたらしき人物を墓地で目撃しています。時間は、朝の5時半だったそうです。僕も実際に車で走ってみました。あの墓地から、この九十九里までは、空いている時間であっても、1時間半はかかります。ですから、あなたに第三の殺人は、無理なんです。」

「...俺が殺した。」

それでも尚、吉田は言う。

「吉田さん...。」

その時、吉田が自分の腕時計をチラリと見るのを、新之助は見逃さなかった。新之助も自分の腕時計を見た。

「まもなく18時...。吉田さん、何があるんですか？...あ！」

新之助は自分でそう言って、何かに気がついたように、携帯電話を取り出し、どこかに急いで電話をかけた。

「花井か！？児島元大臣の家に警察をやるんだ。急げ！！」

そう新之助が怒鳴ると、吉田はその場に崩れ落ちた。しばらく経って、今度は新之助の携帯電話が鳴った。

「...。わかった。元大臣は無事なんだな？...うん。そうだと思った。こっち？こっちは大丈夫だよ。」

そう言って、膝をついている吉田の肩に手をかけ、

「吉田さん、元大臣は無事だそうです。それから、あなたの奥さん、真知子さんは元建設大臣、児島誠一郎を襲おうとした所を逮捕されました。」

と吉田に告げた。

「あいつは関係ない！関係ないんだ！！」

最後は泣き叫ぶようにして、吉田が言った。すると新之助が、

「奥さんは、『ホームレスを刺したのは私です。吉田ではありません。公園取り壊しの命令を出した児島元大臣も殺そうと考えていました。』とパトカーに乗る時に刑事に言ったそうですよ。」

「...馬鹿な事を...。」

吉田は、地面にうずくまってしまった。

やがて、数台のパトカーがやってきて、吉田を連れていった。

小幸はただただ、その様子を眺めているしかなかった。

「小幸ちゃん、大丈夫かい？見つけるのが遅くなってごめん...。」

新之助が小幸を抱きしめながら言った。

何故か、小幸の目から次々と涙がこぼれおちた。

事件が解決してから、1ヶ月が経ち、九十九里も少しずつ秋らしい景色に変わってきた。APPLE HOUSEは取り壊され、更地になり、事件の事もあったからか、まだ買い手のないままになっていた。

「新之助さん、私気になっていた事があるんです。」

「なにかな？」

「2番目の事件の後、新之助さんはイルカが見たいと言って、水族館に私を誘ってくれました。あれは既に、園部恵子さんを疑って、行ったんですか？」

「ああ、あれは...。」

「はい。」

「APPLE HOUSEで小幸ちゃんが宿題をやっていた時があっただろう？花井もいた。」

「あ、花井さんが私に勉強を教えてくれた時ですか？」

「そう。その時にね、カウンターにあの水族館の割引券が置いてあったんだよ。」

「そうでしたっけ？」

「それで、1枚もらっておいたのさ。」

「そうだったんですか。」

「小幸ちゃんを何とか誘う口実を作ろうと思ってね。」

でも割引券の事なんて新之助は一言も言わなかったな、と思いながらも小幸は納得したフリをした。

水族館の事も探偵の勘というやつなのだろうか。

「吉田さんたちはどうなるんでしょうか。」

小幸は話を変えた。

「そうだな、吉田さんは2人殺してしまっているし…。亜矢ちゃんの事故の事を情状酌量してもらえとしても、時間がたち過ぎているからな…。俺には…わからないよ。」

新之助が視線を落とすと、

「私、あの夫婦はきっとやり直せるって思うんです。」

「そうか。」

新之助は暗い表情を変えた。

「つる屋のご主人の事を話したろう？」

「あ、あの海で溺れて亡くなった？」

「うん、あの事故については再捜査が行われることになったよ。」

「再捜査？」

「やはり、今回の事で、事件性が疑われてね。容疑者は木村悟史だから、死んでしまってるんだが…。」

「そうなんですか…。」

「でも、調べて行ったら、あのリゾートホテルの件にも兇島が絡んでいるらしいんだ。もしかし

たら、つる屋の主人殺害にも関係があるかもしれない。ああいうやつは叩けばいくらでも埃が出る。」

「犯罪すれすれの所で悪事を働いてきたみたいだけど、今回はきっと、兎島もただじゃ済まないよ。」

「そうですか。」

「...小幸ちゃん、それは？」

小幸が掌の中に持っているものを見て新之助が聞いた。

「これは、ひまわりの種。今年、咲いたのを取っておいたんです。」

「でも...。ひまわりの種って春に蒔くんじゃないのかい？」

「そうなんですけど...。今ここに、蒔かなくちゃいけない気がして...。」

「そうか...。小幸ちゃん、これを見てごらん。」

そう言って、新之助が一枚の古びた画用紙を取り出した。

「これは...？」

「吉田さんの娘さん、亜矢ちゃんが描いた絵だよ。」

そこには、ひまわり畑でほほ笑む親子3人の絵が描かれていた。  
APPLE HOUSEが取り壊される前に、店の奥の引き出しから見つかったらしい。

画用紙の裏には、覚えてたのひらがなで、

[ぱぱと ままと おおきな ひまわりを みました  
こんどは さんにんで おおきな うみが みたいです

あや]

と書かれていた。

「吉田さんは、この九十九里の海を、毎日どんな想いで見ていたんでしょうね。」

小幸が涙目でそうつぶやくと、新之助がこう言った。

「3人で見るはずだった景色を思い描いていたんだらうな。」

海はその日も穏やかに、しかし休むことなく波を寄せては返し、その景色を見守っていた。

完